

---

# 楽園を吹く風 ~ 『Elysium』 × 『離宮の乳母さま』

高宮 かしお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

楽園を吹く風『E l y s i u m』x『離宮の乳母さま』

### 【Nコード】

N9244U

### 【作者名】

高宮 かしお

### 【あらすじ】

「特別研修」の名目でウイナ・リゾナ王国に招待されたルイ。彼の希望で同伴した私、まどかがそこで出会った人物とは……日本人女性！私の他にもこっちの世界に召還された人がいたなんて！日野小梅と名乗るその可愛い女性を目の前に私の驚きはさることながら、ルイの驚きも相当なもの。ほら、彼女に興味津々の様子だもん。……え？興味津々？うーん、彼の彼女への接し方、なんだかちよっと引つかかるんですけど！もしかしてこれは私の恋のピンチ？！遊森謡子様の作品『離宮の乳母さま』から小梅xカザムのカツ

プリング、そして高宮の自作『Elysium』からまどか×ルイ  
のカップリングをお届けする、コラボ作品。 どちらの作品を読ん  
でいない方でも楽しめる内容になっております！はずです！！話は  
まどかと小梅の一人称、交互視点で進んでおります。 \* 8 . 9 . 2  
011 第二話一部修正しました。

## 第一話

地球からずっとずっと、何光年も離れたエクスピダル惑星群のひとつ、イリア・テリオ。

その星のひとつにアカルディルという国がある。その首都、アカルディルに私、<sup>かなめ</sup>金目まどかは召還されて気がつけばこの生活も6年目を迎えていた。

イリア・テリオにはそれぞれの国に軍事機関があるけれど、そのひとつ、アカルディル国の私が籍を置く”バーシス”は、その中でも有数な組織として名を知られている。それでも結構平和安住が保たれているので、軍事組織としてはあまり機能してないのですが。それでも私はここでトレーニングや勤務に励む毎日。

「金目、今やっている仕事が片付いたら今日は上がっていいわよ」

私の正面の壁を背に、デスクを構えている管理部長がディスプレイから顔も上げずに言った。

「はい、もう少しで終わりますから」

私が答え終わると同時に音もなく管理部のドアがスライドし、よく見知った男が部屋に入ってきた。まあ、よく見知った、というのは……つまり、私の恋人でもある……

「おや、カネラ・イルマ。どうしたんですか？」

意外な訪問者に、ミケシュさんはディスプレイから顔を上げた。今足を踏み入れたばかりの彼はぐるりと部屋を見回し、私の姿を見ると、おや、と目を細めた。

「オレはシャムに呼ばれてるんだが、聞いてないのか？ まあ、その前に来月の授業の変更に来たんだが……って、なんで看護チームのまどか管理部で仕事してるんだ?! この他の連中はどうした

？」

……バーシスでカネラという大佐の称号をもつ研究者、兼教官職の私の恋人、イルマ・ルイは苛立たしげに濃い栗色の前髪をふわりとかき上げた。ミケシユはメガネのブリツジを指先で押し上げる。「他のクルー三人は、昨日の打ち上げで食中毒アタリです。なぜか私ひとりこのようにぴんぴんなのですが……私だけではもちろん業務は滞りますので、長官に相談しますと、『なら金目を使っていい』と許可が下りたので」

「シヤムのヤツ、我がまま言い放題だな」

「最高司令長官ですからね。それでも機能していますから」

愛想も何もなく彼女は答える。

「不思議なことにな。おい、まどか。もうそんな仕事切り上げていぞ。おまえついでにオレと一緒に来い。シヤムに文句のひとつでも言っておかんな。ああいう男はつけあがるばかりだ」

私は仕事をしつつ、彼らのやりとりを小耳に挟んでいたところ、急に自分に振られたことでびくつと変に反応してしまった。だって、文句って……最高司令長官に、よ？

「え……と、文句ならイルマ教官が一人で言いに行ってくださいよ。それにもう仕事は終わりましたし……私は大人しく帰ります」

そう言い、席を立つと壁に沿ってなるべくルイと距離を置くようにしながら、ドアの方へ移動し始めた。どうみても不自然だが、長官とルイのごたごた（ほとんど私情）に巻き込まれるのは勘弁！ そんな私をルイは横目で追っていたが、なにやら急にその眼力が増した気がした。

「まどか？ どうせ帰る家は一緒だろ？ それとも何？ おまえは喜んでシヤムの言いなりになりたいとか思っているわけ？」

私は壁に張り付いたまま首を振った。なんでこうなるのー？

上司の命令に従ったまでのにー。と、心の中で叫んでも、今や蛇に睨まれたカエル状態だ。

「いえ……いえいえいえ」

「じゃあ、おいで。一緒に行こう。ミケシユ、お疲れさま」

ルイは私にっこり微笑むと、しぶしぶ彼に近づいた私の手を取り、管理室を後にした。

夏の陽光が遮光ガラスにカットされているのにも関わらず、その光は遠慮もせず最高司令長官室に溢れている。

「おまえね、なんで勝手にまどかを管理部で働かせてるんだよ」

「勝手に、って。だって私は長官だからね。バーシスの全ての権限と責任は私にあるのだけど。忘れたのかな？ イルマ ルイ君」

長官が小首を傾げるとワンレングスの髪が肩でさらりと揺れた。彼はものすごく大きなデスクに組んだ両手を軽く置き、少し気だるそう正面に立つ私たちを見上げた。

シャム・エルジオ・エステノレス長官は32の若年にしてバーシスのトップ……で、ルイの幼なじみでもある。そして、彼の趣味は2つ年上の幼なじみをからかうこと、……が今日までの私の見解。

「まあ、そんなことよりね、ルイ」

「なんだその不気味な声色は。またなんか企んでるな？」

前髪で隠れているけど、きっとルイの眉間にはしわが寄っている。「いや、ただの任務だよ。ウイオ・リゾナに行ってもらおうと思っ  
て」

「買い物かなにかに行くような口調だな」

「研究だよ。」星心印<sup>シン</sup>のね」

「あの……表意文字の、か?!」

ルイの目が興味深そうに輝いた。な、何？ ”シン”って……私の頭の中ではなマークが飛び始めたが、ここは私が口を挟むところじゃない。

「うん。ウイオ・リゾナって割と新しい王国だろ。それでまだ知られていない部分が多い。この”シン”のせいでね。おかげ、ともい

うのかな。この言葉は神の言葉だ。つまりそれを使うウイオ・リゾナの民は神によって守られている。まあ、早い話がウイオ・リゾナと今後共同研究など接触が増えそうなんだが、この”星心印”がやっかいだね。翻訳機で読み取れないものがけっこうあるんだ。ルイの任務はそれらの調整と、あと実際におまえが言葉を勉強してやること。外枠だけでもいいからどんなものかね。現地で実際に見聞きした方がいいだろ。習慣の違いからも言葉は違ってくるだろうし」

「ふん、短期語学留学、つてところか」

「まあな。それに、だ。こっちには同時にウイオ・リゾナから星心術士ラズト・ジエガルトが来てくれて、うちの技術者にレクチャーしてくれることになっている」

「え？ ジエガルト殿が？」

「知ってるのか？」

「ああ、何度か合同研究会で顔を合わせたことがある。医師としてもかなりの腕を持つ。頭が切れるし、彼と話をしているだけで全く飽きることがない」

へえ……偶然にもそんな繋がりがあるんだ……。

私は隣に立つ恋人の横顔を見上げた。

「ま、ご親切にもこの話を持ちかけてきたのはレモニーナ殿だからな。断るなんて選択肢は無い。ルイ、おまえはレモニーナ殿の指導のもと、いろいろ学ばせてもらえるんだ。光栄だろ？」

長官は片方の口の端を上げてにっと笑った。うっ、いつもながら妖麗だわ。そんな風に長官を見ている横で、ルイはすつと人差し指を長官に軽く突き出した。

「レモニーナ殿……の名前はもちろん研究者の権威として知られるが、あれだ。レモニーナ殿と言えば……」

一瞬、長官の顔が凍り付いたように見えた。つて、まさか、ね。たとえこの星が割れたとしても口角ひとつ持ち上げないような肝っ玉の持ち主がね……

「そつだ、シヤム。おまえが確か軍事学校2期、17歳のとき！

夏期格闘技ワークショップで当時指導員として来ていたブロンドの君に交際を前提に試合を申し込んだ無謀な学生がいて、結局全治2週間の傷を負わされたんだっただよな。そのときのブロンド美人がレモニーナ殿で、そのバカ男が……おまえだ」

「くっ！ おまえ、どこでオレの淡い青春のページを……おまえはオレと学年が違うからその話は耳に入らないはず……」

よっぼど悔しいのか、長官は苦虫を噛み潰したような顔をしている。……初めて見た。こんな長官。

「いや、獅子王がな。ちよつとしたネタとしてな。そうか〜。レモニーナ殿か。うん。確かに光栄だ。おまえがお世話になった方なら特にな。で、どのくらい滞在すればいいの？」

「……10日間」

ふん、とルイは顎に手を持って行く。

「じゃ、まどか同伴な。それで、プラス一週間休暇。オレ、10日間もおまえの近くにまどか置いとけないし。たしかおまえの奥方と子どもは実家に帰省中だったよな？ ならなおさらだ」

「お、おまえ、これは仕事だぞ！ 上司の命令！ 辞令！ ガキじやねーんだから、一人で行け！」

あらあら、長官かなり乱れているわ……珍しい。っていうか、え？ 私?! 同伴?!

「シヤム」

「なんだ？」

鼻息荒い長官を前に、ルイはにやりと口の端を上げる。

「レモニーナどの」

「！」

「はい、決まりね〜。出発いつ？」

「3日後だ……」

「了解、エステノレス長官」

わざと慇懃な声でルイは答え、そしてトントン拍子に決まった話にまだ混乱気味の私の手を取ると、上機嫌で長官室を後にした。

さて一方、やっぱり地球からは、時空だか何だかよくわからない単位で離れた場所に、ぼつんと存在する惑星・ガデュエリオン。

大陸ではいくつもの国が、ぶつかり合ったりくつつき合ったりと戦国時代の様相を呈しているそうだけど、少し離れた島国であること、ウイオ・リゾナ王国では、実に牧歌的な時間が流れていた。

「はあ…何だか変な気分」

牧場の間をつらぬく農道を、大型のアンピイ（カモシカ）の背に揺られて進みつつ、私は軽いため息をついた。

私の後ろで手綱を取ってくれている、護衛士の力ザムさんが、ふつと笑ったのが心配でわかる。

「王子が心配ですか？」

「ううん、王子はサマーキャンプすごく楽しみにしてたし、女性護衛士さんが何人もついてくれてるから心配はしてないんですけど。私の方が寂しくなっちゃって」

私、日野ひの 小梅こづめは三年前、この新興国に日本から召喚されて、ひよんなことからウイオ・リゾナの王子さまの乳母をやることになった。

普段は郊外にある離宮に住み込みで、王子のお世話をしたり離宮全体の管理をしたりしながら暮らしているんだけど、今年パブリック・スクールに通い始めた王子が、この夏はサマーキャンプでしばらく留守にすることになった。

キャンプの後も離宮にはすぐには戻らず、王宮の方で何やらお父上とお母上（つまり国王陛下と、その第二夫人）と公務があるそうだからかなり長いこと王子は帰ってこない。

今は、クラスメイトたちと嬉々として旅立つ王子を、キャンプの集合場所まで送ってきた帰り。この機会に、私も少しは子離れ（？）

しないよね！

カザムさんが、私の耳元に顔を寄せて言った。

「俺が、コームが寂しくないようにしますから」

ささやかれて、私は耳が熱くなるのを感じる。鞍の前の部分につかまった手に、余計な力が入ってしまう。

カザムさんと、恋人同士と呼べる関係になってから、まだ日が浅くて慣れない私。日本に心を残したまま、こちらで生きていくしかない私を、カザムさんはすごく大事にして優しく接してくれる。まるで、お姫さまにかしづく騎士のように。

こういう時にさらっと何か、カザムさんが喜ぶようなセリフを返せたらいいのにな。

「あつ、そうだ、お客様がいらつしやるんですけど！」

別の話を始めてしまうのは、照れ隠しです。

カザムさんも体勢を戻して、

「ああ、聞いています。ガデュエリオンと交流のある星、イリア・テリオの方でしたね」

そう！ 他の星との交流があつたなんて、恥ずかしながら今まで知らなかったの。

ウイオ・リゾナ王国には、日本のようにデジタルなものは普及してしない。電気で動く自動車や家電はあるけれど、全ての家庭に普及してるわけではないし、電車や飛行機のような移動手段もない。なので、てっきり宇宙になんて進出してないと思ってた。

というのも、ウイオ・リゾナには動物との関係を大事にする文化があるから。

移動手段には、今私とカザムさんがそうしているようにアンピイに乗る方が一般的。車よりもアンピイと触れあう方が楽しいじゃない、

って感覚なんだよね。

手紙も、主にポステという鳥が運んでくれる。郵便というシステムが存在しないわけじゃないけど、天候条件等でポステが運べない場合に使用されるくらいかな。

特に、結婚式の招待状とか何かのお礼状とか、儀礼上重要な手紙はポステが運ぶのが正式になる。

オレンジ色のツバメみたいな鳥で、飛ぶのがすごく速い上に、“星心印”と呼ばれる特殊な文字で送り先の相手の名前を書くと、その相手のいる場所へ届けてくれるという能力があった。

こんな風に、動物との暮らしが当たり前のウイオ・リゾナ王国は、意識的に人間の文化の発展をゆつくりにして、動物たちに合わせているみたい。ここに来た私はそう感じた。

そんなちよつとレトロな文化で、なぜイリア・テリオと行き来ができるのかというと。

この星には“星心術”という魔法のような術が存在していて、特にこのウイオ・リゾナではその術が発達しているからなのです。

「レモニーナ先生がラスト先生をイリア・テリオに派遣して…代わりに、あちらから研究者の方がこちらに来られるんですけどよね」

カザムさんの言葉に、私はうなずく。

「もう“星心殿”の方に到着されて活動されてるそうなんですけど、レモニーナさんがその研究者の方を離宮にお連れしたいって…どうしてかしら」

レモニーナ・ルイスタ教授は、こちらの世界における私の保護者的存在で、“星心印”研究の第一人者。そして、その弟子のラスト・ジエガルトさんは普段、離宮で王子の家庭教師、兼宮廷医を勤めている。

それに護衛士のカザム・セージスさんに、王子の両親と姉上、叔父のフアシード・アスカスさん…私が異世界の人間だと知っているのは、主にこの七人だけ。あ、あと王子自身ね。異世界の人間が王族の乳母をやるのはちょっと問題ありなので、このことは内緒なんだ。

カザムさんはちょっと考えて答えた。

「離宮には王家の博物館がありますから…こちらにしか保管されていない資料などもあるんでしょう。それに、ラズト先生が持ち込んだ資料もあるし」

「そっか…そうですね」

それなら、博物館に移動しやすい場所にお部屋をご用意しようかな。レモニーナさんのお客さまだし、粗相のないようにしなくっちゃ。今は特に、離宮内はちょっと人手が少ない時期だし。

「俺もしばらく泊まり込みますから、何かあったらいつでも言ってお下さいね」

カザムさんの鍛えられた身体から、優しい声が響いて伝わってくる。

…私とカザムさんって、職場が一緒の上に私が住み込みのせいか、あんまり二人きりになることがないんだよね。

カザムさんは、出会ってから今まで、私にたくさんのものをくれた。でも、私がかザムさんにしてあげられたことなんて、ほとんどないような気がする。

それが何だか申し訳なく感じられる、今日この頃だった。

## 第二話

私とルイは“星心殿”<sup>シーニラム</sup>と呼ばれる敷地の一角に船を停め、少し小高くなっている丘の、そこから向こうに広がる街を見渡した。澄み切った青い空が、近い。

「私たちの文化は、動物たちとともに歩んで来たとも言えるのです。だから、街の中にも自然がとても多いのが特徴なんですよ」

「迎えに来てくれた白衣をびしつと着た年配の男性が目を細めて言った。」

星心殿のある場所から緩やかに丘は下り坂になり、降りきったところに大きな運河が横切っていた。街は全体的に白い建物が目立ち、大きな道に沿って必ず緑の街路樹が連なっていた。

「なんだか自然公園の中にいるみたい」

私は隣に立つルイのシャツの袖を軽く引きながら言った。

「あ、ああ。ずいぶん動物たちが慣れているもんだな」

「あんたたち、だれ？」 とでも言いたげに一頭の大カモシカがルイの脇腹をその湿った鼻で突いていた。

「それはアンパイという動物です。私どもの間では車よりも日用的な移動手段なのです。さあ、レモニーナ殿がお待ちかねです。ご案内しましょう」

彼は私たちを神殿の中に招き入れた。

長く続く白いピカピカの廊下を、私は落ち着き無く回りをきよるきよる見ながら進んだ。

全体的な雰囲気こそ、地球のどこかの大学のようにだけど、一部はもととは草むした遺跡だったそうだ。大陸側の戦争のせいで散らばってしまった知識を先人が拾い集め、この島のこの場所を拠点にして“星心術”として体系化していったのが、この国の成り立ちに関わっているらしい。

そして、目の前で見た“星心術”は、まさに魔法だった。

「本当、驚いたのよ、あの時の男の子がバーシスの長官さまになった時は」

金色の短髪がボーイッシュなレモニーナ・ルイスタ教授が、シャツの袖をまくりながら楽しそうに亜麻色の瞳をくるくるさせた。

「もったいないことしたわ、あの時は、私がウイオ・リゾナの伝統的な武器を使えるんで、そちらの学生さんたちにレクチャーに行つたのよね。で、格闘技の時間にいきなり、交際を前提に試合を申し込まれて…」

レモニーナさんはクスクス笑いながら、左腕に刺青のようにぐるぐると刻まれた不思議な文字列を指でタッチした。すると、『神から賜りし印』である“星心印”が光る列をなして現れ、彼女の腕の周りでゆっくりと円を描いた。

「だって彼つたら組み合つた瞬間、十以上も年上の私に『レモンちゃんって呼ばせて欲しい』とか言うから、ついプチッと切れちゃつて。うーん、私も若かつたわあ」

私の隣で、ルイはお腹を抱えて笑っている。

「ひー、れ、レモンちゃん！ オレ、この話を聞けただけで、ここに来た甲斐があつた！」

私はちよっぴり、長官が気の毒になつた。この話をネタに当分遊ばれるだろうなあ。

私とルイ、そしてレモニーナさんがいるのは、研究都市の一角にある『転移ホール』と呼ばれる場所だつた。ここから、郊外にある王家の離宮へと移動するんだそうだ。

「あつちにも見せたい資料があるし…それに、会わせたい人もいるのよね」

というのがレモニーナさんの弁。

王子さまが暮らしているというお城には興味があつたけど、今は

王子さまは留守だというし……誰と会わせて下さるのかな。何だかレモニーナさん、私を初めて見た時にビックリしている様子で、それから私が日本人だと聞いて目を輝かせてたけど……。

レモニーナさんの指が、豎琴を弾くように空中の印を弾いて行く。次々と光を放つ印、そして足元の床にも魔方陣のように刻まれた印が、それに呼応するように光り出す。

“星心印”……恐ろしく複雑な象形文字のようなそれは、まるで漢字の意味を部首やつくりから類推できるように、誰にも等しく読むことを可能にする。そして、印の持つイメージを深いところまで読み取れる人だけが、その力を引き出すことができる。

床に刻まれた方の術円には、どこかへと移動するための術が組み込まれていて、レモニーナさんの腕に刻まれた方の術円には、その移動先が示されているらしかった。

「ルイ、マドカ、行くわよ」。シズ・カグナ離宮へ！  
強い光が満ちた。

目を開くと、そこは塔の上の方にある円形の部屋だった。縦長の窓がいくつもあって明るい光が差し込み、天井も柱も床もアイボリーの石できていてツヤツヤと光っている。床には、先ほどの部屋と同じような術円。

部屋の端の方には階段の降り口があって、そこに一組の男女が立っていた。

「コーメ、カザム、連れて来たわよ」

レモニーナさんの声に、二人が頭を下げる。

「シズ・カグナ離宮にようこそおいで下さいました」

前に立つ女性が、にっこりと顔を上げた。紺色のジャンパースカートの白いエプロン、それに頭にレースの頭巾のようなものをかぶっている。うわ、お帰りなさいませ、ご主人さま』ってセリフが似合いそう。

「私、オージ殿下の乳母で…つて、え？」

「あれ？」

私も思わず、声を上げていた。

黒目、黒髪の彼女。その顔立ちはまさに…。

「にほんじん!？」

同時に声を上げたものの、お互いに次に続くものがなく私たちは顔を見合わせるだけだった。

そんな私たちを見てレモニーナさんがくすつと小さく笑った。

「あらあら、あなたたちがそこまで驚くとは思わなかったわ。まあ、マド力を見たときには実際私もまさかとは思ってたけど」

「確かに驚いたな……」

まるで私の代弁をするようにルイが言った。

「まさかコーメ以外にも日本人が……」

「コーメ…小梅さん？ の隣に立つ男性も唸った。

「はいはい、同郷の方は同郷の方同士でつもる話もあるでしょうから、私はルイを資料室に案内してくるわ。カザム、あなたも仕事がないなら一緒に来る？ あ、ルイ、紹介がまだだったわね。この青年は王国の護衛士カザム・セージス。優男に見えても腕はかなりのものよ。そして、まだ目を丸くしているのがコーメ。第二王子の乳母さまで、この離宮の管理もしている人」

突然名前を呼ばれてハツとした様子の小梅さんは、挨拶のために彼女に近づき、差し出したルイの手をはにかみながら取った。

あ、可愛い。

「す、すみません。つい取り乱してしまいました……オージ殿下の乳母をしております、日野小梅です」

「イルマ・ルイです。短い間ですがお世話になります」

ルイは簡単に挨拶をすませると、すぐにレモニーナさんの方へ向き直った。

「レモニーナ殿、貴重なお時間を申し訳ないですが、早速資料室へご案内をお願い出来ますか」

彼女は軽く頷いた。

「俺もいきます。……あ、」

レモニーナさんのもとへ足を向けたカザムさんが私の前で立ち止まり、私の手を取った。目元がふつと柔らかくなる。

うつ、な、なんか彼、非常に眩しいんですけど！

「ウイオ・リゾナ王国護衛士、カザム・セージスです。普段はオージ殿下とコーメの護衛を主にしています。困ったことがあったら何でもおっしゃってください」

そつと手を下ろす。

「あ、そうそう」

歩き出しかけたレモニーナさんが、ふと足を止めて私たちを見た。

「マドカが日本人だって知って、どうしてもコーメに会わせたくて連れてきちゃったけど、実はコーメが日本人だってことはこちらでは秘密なの。シャム長官と私の顔を立てて、ルイたちも内緒にしといてちょうだいね」

口の横に手を当ててひそひそつと話したと思ったら、ぱちんとウインク。なるほど、長官はこれにバキュンとやられたのね。

「レモニーナさん……ありがとうございます！」

ぱっ、と笑顔になった小梅さんは、少し瞳を潤ませていた。

「じゃあ、あとでな、まどか」

ルイは短く言う。

そしてレモニーナさんは殿方を率いて部屋を後にした。

「改めて初めまして。日野小梅です」  
彼女はふわりと笑った。ほんとうに白い梅の花のような可憐な笑みだった。

私たちは日の降り注ぐ窓際の小振りなソファに並んで座っていた。窓の外には美しい庭が広がっている。

「あ、金目まどかです。……いや、でも本当に日本から来られたんですよね」

「ええ、まあ、”来た”というか、召還、っていうんですか。それでここに来て3年になります」

「あ、私も召還です。でも小梅さん、召還されて乳母さまになるっていうのも面白いですよ。珍しいと言っか」

「あはは、そうですね。最初は、自分が乳母やつてるなんて思ってなかったんですよ。だって、目が覚めて隣に赤ちゃんが寝ていたら、もう必死でお世話するしかないですしね！」

そのときのことを振り返るように、小梅さんは当時のことから今日までの話をしてくれた。やっぱり始めは馴染みの無い世界で苦勞されていたみたいで、つい自分と重ね合わせて話に引き込まれてしまっ。

私も簡単にイリア・テリオでの自分の身の上話をし終わると、話は自然と日本のことになった。

「あ、すみません、小梅さん、お年っていくつなんですか？」

彼女は小首を傾げた。そういえば、いくつだっけ、と言った感じ。「今年で33ですね」

「わ！ 見えない。同じくらいかももう少し下にも見える！ って、失礼ですよ。私もたまに若く見られますけど、20代前半に見られたときにはなんか逆に『舐めてるのかー』っておもっちゃったり。あ、私は31なんです。でも異世界経験値は私の方が上みたいです  
ね」

私はエツヘンと胸を張ってみせる。小梅さんはまたからりと笑った。この人の笑顔はこちらが和んじやう、そんな優しさがある。

「和食が恋しくなったりしませんか？」

「ふふ、実は、イリア・テリオには醤油と味噌があるんですよ」

「うわ！ う、うらやましいです〜！ こちらはお米はあるけど、お味噌汁は食べられなくて」

「私はB級グルメも恋しいなあ。ラーメンとか、おでんとか、タイヤキとか」

「懐かしいですねえ。白いタイヤキとか、好きだったな〜」

「白！？ なんで白！？ 今そんなのが！？」

懐かしい日本の話に花が咲き、気がつくと昼の日差しはだいぶ柔らくなっていた。

「そういえば、まどかさんは日本との交信手段ってどうされているんですか。やはりイリア・テリオにはそう言った技術が発達しているんでしょう？」

「いえ、実は全くないんです。それに召還された時点で私の存在は地球には無いことになっています。でも、一緒に召還され、帰って行った仲間たちの記憶には私が生きているんじゃないかな……。調べる術はないから何とも言えませんが」

そのとき、レモニーナさん一行がもどって来た。

「あ、お帰りなさい」

小梅さんは立ち上がり、レモニーナさんに近づいた。

「コーメ、私は今からまたちょっともどらないといけないの。だからあなたにルイの仕事のアシストを頼んでもいいかしら。そしたらとても助かるんだけど。もちろん出来るかぎり私も顔を出します」

「えっ、私がアシストなんて出来るんでしょうか」

「軽く翻訳をするくらいよ。ルイはまだここの文字に慣れていないから」

「それなら、よろこんで」

「すみません。お願いします」

あの常人以上から目線のルイが、申し訳なさそうな顔をしているなんてなかなかレアな見物だ。まあ、貴重な資料を研究させていただくんだもの、当然よね。

「あ、でも今から少し仕事があるので、後からお部屋の方へ伺うということでもよろしいですか？」

「そうしていただけると助かります」

ルイが初対面の人にはほとんど見せることのない、くだけた笑みを見せた。

### 第三話

そんなわけで、レモニーナさんはいったん転移して帰って行った。私はまどかさんとずーっとおしゃべりしてたいくらいだったけど、まどかさんも離宮見物したんだろうし、私の方も仕事仕事！ 後はカザムさんに任せよう。

王子の護衛をしてきている護衛士さんからの定期的な連絡を読み、公的な手紙を一つ二つしたため、それから厨房へ。研究に没頭しているルイさんに、お茶と軽食を持っていこう。

本格的な食事よりも、きつと手軽に食べられるものの方がいいんじゃないかな…私の知ってる“星心術士”さんたちもみんな、没頭中はそうだから。

ワゴンに準備をして、渡り廊下を博物館の方へ押して行く。

…まどかさんとルイさんは、お付き合いしてるのよね？ いつもどんな風に過ごしてるんだろう。忙しいみたいだけど、私とカザムさんと同じであんまり二人の時間はないのかな。

美男美女のカップルだし、お互い浮気とか心配してたりして。

ああ〜それにしてもまどかさんって、美人だしスタイル良くてうらやましい！ カザムさんどう思ったかな、今まで日本人と言えば私しか知らなかったわけだけど、まどかさんみたいな女性もいるんだってバレちゃったよ。

…嫌だ、何だかもやもやしてきちゃった。散れ散れ！

そんなことをくよくよと考えながら博物館の手前まで来た時、中庭の方を白い光が横切った。

あつ！ カザプカが来てくれた！？

私は急いでワゴンを脇に寄せ、渡り廊下の段差を飛び降りて中庭に走った。

カザプカが白い陽炎のような翼を羽ばたかせて、庭の石像の上に舞い降りたところだった。

このカザプカという鳥は、神の遣いと言われている。召喚された私のためにこちらの世界での名前をくれたのも、この鳥だった。

実は、私は日本に、十代で産んだ娘を残してきている。カザプカはその能力で、私の書いた手紙を時空を飛び越えて娘の所まで届けてくれるのだ。逆に、娘の手紙もこちらへ運んでくれる。

そして今日もやはり、カザプカはくちばしからはらりと封筒を落としてくれた。

「ありがとう、カザプカ…あなたが日本との橋渡しをしてくれるから、いつも救われてます」

持ち歩いている娘あての手紙を、カザプカに差し出すと、カザプカはまたそれをくわえてふわりと舞い上がり、一気に上昇して虚空へと消えて行った。

見送った私は、後ろに何か気配を感じた。

くるり、と振り向くと、ルイさんと目が合った。そこは、ルイさんが作業している部屋の窓の、真ん前だったのだ。

開いた窓から、ルイさんが眼鏡越しの目を見開いてこちらを見ている。

「…小梅。今、日本との橋渡し…って？ どういうこと？」

あわわ。いや、ルイさんまどかさんには知られても構わないんだけど、離宮の他の人間に聞かれるとまずい…。

「あ、えっと、今そちらに回ります！」

私は急いでワゴンの所に戻り、ルイさんのいる部屋に向かった。

「それじゃあ、小梅は一応、日本と連絡が取れている状態なんだな？」

私がうなずくと、ルイさんは何か考え込みながら、たぶん無意識にスモークチキンのサンドイッチに手を伸ばして食べ始めた。私は

黙ってお茶を淹れる。

ルイさんはふと食べるのをやめて、

「じゃあまどかも…いや、あっちが覚えてない…それに“星心印”の問題が…」

つぶやきが止まったと思ったら、また食べ始める。

そしてまた、夢から覚めたように、

「ああ、失礼。一瞬意識が飛んでた。あれ？この皿、いつの間に空に」

私はつい笑みをこぼしてしまった。『一瞬』って、ゆうに十分以上経ってますよ。まどかさんのことを考えていたの？

「ルイさんとまどかさんは、本当に…お似合いですね。お忙しそうですね、いつも二人の時間はどんな風に過ごしてるんですか？」

「そりゃあ二人ですること言ったら…」

そこでルイさんはいったん止まり、視線を宙に一瞬泳がせて

「…映画を観に行ったり？」

そっか、やっぱり共通の趣味があるといいよね。あれ？でも微妙に疑問形じゃなかった？まあ、たぶん数あるうちの二つってことなのかな。

私も、カザムさんと一緒にアンピイに乗るのは好きだけど、自分で手綱を取れるようにもっと練習しよう。

…って、私、思いつきりお仕事の邪魔してない？

「ごめんなさい、長居しちゃって！ごゆっくりどうぞ」

私はあわててルイさんの部屋を出た。

朝と昼は小梅さんもカザムさんも仕事の関係で私たちと一緒に食事をするのではないのだけど、夕食は二人そろって同席してくれた。「きゃーっ！ヤキトリだーっ！タレと塩とネギマとつくねもーっ！」

テーブルの真ん中に置かれた大皿に豪快なヤキトリの山に私が感

激して声をあげると、小梅さんは可笑しそうに微笑んだ。

「ふふ、料理長、頑張ったみたいですね。タレと言っても、こちら仕様です。日本の調味料はほとんどなくて……だから、まあ、お肉と野菜の串焼き、なんですよけどね」

「あ、確かにこうひとつひとつが微妙に大きいような」  
私もつい吹き出してしまふ。

「そうだ、ラズトさんに頼んでおきましょうか。小梅さんへのお土産は味噌と醤油、ダース、って」

「あ！ それがいいです！ ラズトさん重いだろっとな、でも頑張ってもらおう」

小梅さんはうふふ、と含み笑いをしている。

「あ、あと私が漬けた自家製梅干しもあります。まだ若いですけど、よかつたらどうぞ」

「ええっ！ 梅干し自家製ってすごい！！ ちょ………すごすぎてクラクラします」

小梅さんもカザムさんも普段着に着替えてリラックスした様子。

カザムさんは割と無口だけど、飲み物を注いでくれたり、まめに小梅さんのお手伝いをしている。パステルカラーのカットソーとベージュのパンツを合わせた小梅さんを見ると、やっぱり自分と同じ日本人だなんてつくづく思う。

「あ！ そうだ。自家製と言えば、私、自家製のきゅうりのXちゃん持って来たんです。普通にキュウリから作るんですけど、かなり本物に近いんですよ。私、米と漬け物が無いと生きて行けないんで……」

「何？ おまえそんなの持って来てたのか？ 出発間際にごそごそしているかと思えば……」

隣に座ったルイが何気に引き気味。

「えー、ルイだって普段喜んでばりばり食べてるじゃない。お互い日本人なんだから遠慮無しでいきましょっよ」

「え？ お互い、って……ルイさんも？」

カザムさんは私たちにサラダを取り分けている手を止めた。

「まあ、半分、だけど。母がやっぱりこっちの世界に迷い込んだので。あ、でもオレは一度も日本に行ったことは無いですよ。母を通して話を聞いたのと、映像で見たくらいかな」

「それでも、お二人に共通の部分があるって、なんだか絆が深くなるようでいいですね」

小梅さんが、カザムさんの差し出すサラダの皿にいくつか串焼きをチョイスして盛りつけてくれる。

「うわー、なんかこの二人の共同作業って新婚さんみたいに初々しい。それでもなんとなく息が合ってるところが……ちゃんと聞いてないけどやっぱりこの二人って付き合ってるのよね？ 明日でも聞いてみようって。」

「そう言えばカザム君の反応……」

ルイが言いかけると、

「カザムでいいですよ」

彼は親しげに口角を上げた。

「カザムとラスト殿の反応がとても良く似ている。オレが日本人の血が混じっているって話したとき。そうか。それはやっぱり小梅のことがあったからなんだろうな。ラスト殿は小梅のことは何も言っ てなかったけど、今なんかつじつまが合ったと言うか……」

私たちの前に食事が盛りつけられたお皿が置かれたので、食事が始まった。お肉はふかふかしているし、サラダはシャキシャキだし、梅干しも程よい塩加減。はあ、幸せ。

「そういえばどうしてルイさんはラスト先生と？」

「研究発表会でね、テーマは違ったんだけど彼はなかなか面白い視点で研究をされていて。それでオレが話しかけてから意気投合している感じがな。今回は行き違いになって残念だったけど。そうだ、今度は君たち三人でイリア・テリオに遊びに来るといい。船を迎えに来させよう」

「あ！ それ、いい！！ 小梅さん、カザムさん、是非」

「え……そんなこと、可能なんですか？」

小梅さんは伺うようにカザムさんを見上げた。カザムさんは柔らかく頷き、

「ソラミール様にお休みをいただければもちろん可能ですよ。コーメはあまりまとまった休みを取っていないので、この機会に申請してみてください？」

「うわー、考えても見なかった。でも、行けたら嬉しいな」

小梅さんは心ここにあらず、といった感じで漬け物を一口に運び、「おお！？ ほんとにあの味！」と感心の声を上げた。

話がウイオ・リゾナのことになり、カザムさんが歴史や街の様子など碎いて話してくれた。

食事をしながら、私はふとルイの様子が少し変なことに気がついた。なんだかぼーっとしているようにも見えなくはない。カザムさんの話に入り込んでいるのかと思うんだけど、そうでもないらしい。ときおり、小梅さんを見て、小梅さんが気まずそうに視線を上げると、ふっとそらす。

な、なんだろ、この雰囲気？

一瞬腑に落ちないものを感じながらも楽しく食事と会話は進み、食後のデザートを堪能してから私たちは先に部屋に失礼した。

ルイは部屋に入るとすぐに資料が積まれたデスクの前に陣取ってしまった。私は窓を開け、さわやかな夏の夜の空気を部屋に入れた。白いさらさらのカーテンが風に泳いだ。少し身を乗り出して夜空をあおぐ。

「見てみてー、ルイ、星が落ちてきそうよ」

私は振り返り、ルイを呼んだ。

「んー、ちよつと待って」

そう言ったきり全く動く気配のない彼。こういうときのルイって何を言ってもダメなのよね。もういい。先にお風呂入っちゃおう。

クリーム色の大理石で出来ている広いお風呂。湯船の四隅にはプルメリアのような花が木の小鉢に控えめに盛って置かれている。甘い香りはそこから立ち上っている。小鉢の横のローソクに灯をともし、お姫様気分満喫中！！

ルイも来ればいいのになー、なんて思いながらお湯をぶくぶくさせてみたりとついつい長湯。

用意された、すんとした可愛らしいノースリーブワンプいのナイトウェアを着て部屋へもどっても、ルイはさつきから1mmも動いた様子はなく、さつきと同じように資料の文字を追っている。

「るーいー」

私は後ろから甘えモードで彼の首に腕を回した。椅子の背、邪魔です。

「あれ？ なんだ。もう風呂出たのか、早かったな」

いえ、かなり経ちますってば。

「ルイ、まだ寝ないの？」

私は彼の横顔にお風呂上がりの火照った頬をすり寄せ、唇を尖らす。

「あ、うん。この資料は持ち出し禁止だから必要なところは写せるところは写しておこうと思って」

「コピーさせてもらえばいいのにー」

「あのね、持ち出し禁止って、複写禁止ってことなの。悪いな、まどか。先に寝てていいぞ。おまえも今日は疲れただろう」

そう言つと彼はちよつと首をひねって私の頬に軽くキスをした。

私は諦めて彼から腕を解いた。

つまんない。でも仕事だもんね。

「おやすみなさい。あんまり無理しないでね」

「うん、おやすみ。オレもすぐに行くよ」

うそつき。

私は寢室のドアを後ろ手に閉め、呟いた。

翌朝、小鳥の目覚ましで目が覚めた。

文字通り、本物の小鳥だ。窓を少し開けたまま眠ったら、隙間からするりと入り込んだらしい。その小さな執事はベッドの蔦模様をかたどる縁に掴まり、チチチ、と歌った。

隣ではルイが端正な横顔を見せてすうすうと気持ち良さそうに寝息を立てている。ずいぶん良く眠っている。

私はふとブランケットを持ち上げて自分の体をチェックした。

はい！ 着衣の乱れ無し！ 肌に変な印付いて無し！

ほっとするやらがっかりするやら複雑なきもちのウイオ・リゾナでの朝。

だ、だからルイは仕事で来ているんだし！！

そうやって自分を納得させようとしている自分に納得いかないものを感じながら、私はそっとベッドから抜け出た。

## 第四話

一夜明けたその午前中をまどかさんと過ごした。ラストさんブレンドのお茶をポットでおもてなし。

「まどかさん、よく眠れなかつたんですか？」

なんとなく、だけど険しいオーラが漂っている……？

「いえ、すっごくよく眠れたんです。朝までもうぐっすり」

そう言っただけだとカップを傾けるまどかさん。

「え……と、じゃあ、ルイさんと何かあつたんですか？」

「いえ、ぜんぜん、何もなかつたですよ！」

「はあ……」

た、たぶんあまり気にしない方がいいのかな。私は次の言葉に困ってしまった、エプロンの裾を少し払った。

「あつ、ごめんなさい……小梅さんに当たっちゃった。だって、ルイって私の気も知らないで、朝食後に”なあ、もしかしておまえ生理か？”なんて言うものだから……ああいう生物オタクにはゾウリムシの一生も私の28日周期も同じレベルだから頭に来ます！  
ねっ?! 小梅さん」

「ぶ、いや、ええっと」

まどかさんの言い方に思わず噴き出しそうになりつつ、返事に困る私。つまり、ルイさんとは何も無いけれども、それも不満、なんだ？

「そっか…恋人がずっと仕事してたら退屈ですよ。カザムさんも不満なのかな…？」

ちよつと自分たちに重ねてしまう。

「カザムさんが？」

「えっ、あつ、口に出てました!? あ、そうだ！」

あわてつつ、私はふと解決の糸口を見つけて彼女に提案してみた。  
「カザムさんにどこかに連れて行ってもらったらいいですよ！ も

うすぐ護衛士の訓練からもどつてきますから、そしたら聞いてみては。もしまどかさんが言いにくいのでしたら、私がポステで伝えておきます」

「え……、カザムさんに？ いいのかなあ」

彼女は少し迷っているみたいだった。私はそれを払うように言葉を継いだ。

「護衛士は、お客様の接待もれっきとしたお仕事です。大丈夫ですよ」

「じゃあ、お願いしてもいいですか」

「はい。じゃあ、一時間後くらいにテラスで落ち合うと言う段取りにしておきましょう。私はこれからルイさんのお手伝いですけど、なにかありましたらいつでも声を掛けてください」

「ありがとうございます、小梅さん」

まどかさんはやっと口元をほころばせた。うん。やっぱり女性は笑っていないと。

私はまどかさんが席を外した後、ティーセットを片付けてから、エプロンのポケットに入れてあった手帳を取り出した。こちらで一般的に使われている文字でメッセージをしたため、窓辺に行く。

左手の薬指の指輪を外し、薬指に刻まれた私の名前にキス。それからその唇で、指笛を吹いた。

空から落っこちるくらいのスピードで、ポステがやってきて窓枠にとまった。足についている通信筒に、カザムさん宛のメッセージを入れる。指笛が吹けるようになるまで、ポステなかなか呼べなくて大変だったのよね。

「よろしくね」

ちよい、とくちばしをつつくと、ポステは弧を描くようにして視界から消えて行った。

ルイさん、昨夜の夕食の時に、何か私に言いたそうにしていた？  
と思つたら、やっぱり部屋に入るなり彼が言った。

「小梅が昨日少し話してくれた、カザプカの話なんだけど、やっぱりもう少し詳しく教えてくれないかな」

「え、ええ、いいですよ。でも、どうして？」

「なんとかまどかの環境でも日本と連絡が取れば、彼女も喜ぶと思うんだ」

「あ…そうか」

まどかさんが手紙を書いて、もしそれをカザプカが運んでくれれば…。

「でも、無理ならぬか喜びだろう。小梅、この話はまだ秘密にしておいて欲しいんだ」

「わかりました」

私はうなずいた。そして、昨日は概略しか話さなかったカザプカとのことについて、詳しく話し始めた。

気がついたらずいぶんな時間が経っていて、またもや私はあわててしまった。アシストするって言ったのに、全然じゃないの！何かお手伝いしないと。

「あ、これ博物館の資料室に返す分ですか？ 持って行っておきましようか」

こちらはデータベースとかなないから、調べものしたりまとめたりは大変だろうな。

「それじゃあ、こっちも」

ルイさんは手元の紙の束を取ろうとして、「！」と一瞬手を引いた。紙で指を切ったみたい。

「大丈夫ですか？」

私が近寄ると、急にルイさんが私の左腕を取った。はっ、と顔を上げると、視線が合う。整った顔立ちに、泣きぼくろがセクシーで、ドキドキする。

ルイさんは言った。

「小梅。もうひとつ、頼みがあるんだけど」

「は、はい……」

私はつい、彼の真摯な瞳の前にノーという言葉忘れてしまう。でも、頼みあって……一体なんだろう。

カザムさんは、小梅さんがちゃんと連絡してくれたのだろう。約束通りテラスで待っていてくれた。

「それではマドカさん、街へ出てみましょうか。ルイさんに断つてこなくていいんですか」

「あ、じゃあ、ちよつと行ってきます」

私はルイと小梅さんが作業している部屋の前までくると、ノックしようとドアに身を寄せた。すると、ドア越しにルイの声が聞こえて来た。

「もう少しこつちに来て……して欲しいな」

え？　なんで……中で何してるの？　そんな私の疑問を無視して、二人の押し殺したようなくぐもった声が聞こえてくる。

「でも……いから、無理……」

「ちよつとだけ……から、見せて……」

「あ……イさん、恥ずかし……」

私は軽く目眩を感じて、呼吸を整えると、そつとその場を離れた。どういふことなんだろう。

そんな言葉がぐるぐると頭の中でループしていた。

私はルイさんののがっかり顔を見ながら、術をかけるために支えていた彼の手をそつとデスクの上に置いた。

「だから無理って言ったじゃないですか、私はまだ回復術は練習中なんですよ〜」

ルイさんに頼まれ、紙で切った指に回復術をかけようとしたんだけど、術円を展開したもののその先が不発に終わってしまったのだ。

「いやいや、でもまどかと同じ日本人の小梅が、術円を展開してるだけで不思議な光景だな」

ルイさんは私の術円をマジマジと見ている。

「あまり見られると恥ずかしいですってば。さあ、普通に治療しましょう、傷はちょっとだけです。…はい、これでよし」

私は、王子のためにいつも持ち歩いている絆創膏（アニマル柄）をルイさんの指に巻いた。

あーあ、回復術ができれば、王子がしょっちゅう作る擦り傷切り傷なんてすぐに治せるんだけど。

「マドカさんはアンピイ、俺と二人乗りで大丈夫ですか？」

私が複雑な気持ちを抱えたまま、カザムさんの待つテラスに戻ると、彼はあのカモシカに鞍を置いたところだった。

「え？ 私一人で乗れますよ。向こうじゃキマイラ乗り回していましたが」

「ああ、キマイラですか。じゃあもう一頭用意しましょう。今日は街を抜けて少し遠乗りに行きます。帰りに街に寄って買い物も出来ますよ。女性は買い物が好きでしょう？」

「好き！ 好きです！」

私は一も二もなく答えた。

川に沿って私たちはアンピイを走らせ、お腹が空くと川のほとりで、小梅さんが彼に持たせてくれたサンドイッチを食べた。中身はペッパーハムと、チーズ。

天気はいいし、緑は多いし、お弁当はおいしいし、隣には素敵な男性が座っているし、こんなピクニック最高。

「あ、そうだカザムさん」

「なんですか？」

デザートのリングゴを川の水で洗っている彼は、私の呼ぶ声に顔を上げた。

「あのー、カザムさんと小梅さんって恋人同士なんですよね？」

カザムさんは虚をつかれたような顔を一瞬したが、すぐに短くはつきりと

「はい」

と答えた。

「あのー、よけいなお世話だとは思いますが、なんだかお二人の間にはまだこう、遠慮の壁みたいなものがうっすらと見えるのですね……あ、ありがとう」

カザムさんからリングゴを受け取る。彼はそのまま私の瞳をじっと見つめた。

うわ。まともに正面から見るとちょ、直視出来ないんですけど。

その穏やかなダークグリーンの眼差しに吸い込まれてしまいそうで「そう見えますか。…それも、仕方が無いかもありません。お互いに気持ちを確かめ合ってからまだそんなに日も経っていないし……それに俺にとって初めての女性なんです。本当に心から大事にしたいと思わせたという意味では」

彼は私からつい、と視線を逸らし、きらめく川面を見て眩しそうに目を細めた。

小梅さんの輝きに心を奪われたときの彼の顔を見た気がした。

「あと……年上の女性というのも初めてなんで、どうしたらいいのかと……それでもコーメはたまにすごく無邪気なところも見せるし、ホント、ちよつとどうしていいの……」

彼は再び私を見、はにかんだ。

きゃーん、胸キューン。

彼がフリーなら即押し倒しているかも！ っ、違っ！ 私最

近行動がルイ化して来ているような……やだ！ 私は思い切りリンゴにかぶりついた。

「小梅さんは、甘えてくれたりしないんですか？」

「あまり。どちらかというと、俺の方がコーメに、こう……」

「メロメロ？」

う、と一瞬詰まったカザムさんは、結局笑いながらうなずいた。

「まあ、いいんです、今の関係でも。俺は三番目だし」

「三番目？」

「コーメにとつて。一番と二番は娘さんとオージ殿下ですから」

「いやいやいやいや！ それはそれって言うか、そうだとしてもさ！

「でも小梅さん、自分があまりカザムさんと過ごせないことを気にしてましたよ」

さつき小梅さんと話した時のことを思い出して言うと、カザムさんが顔を上げる。私は畳みかけた。

「カザムさん、男は我慢してればいいってもものじゃありませんよ！

たまには獣にならないと！」

「え……獣にはすでに何度か……」

「は？ それでもまだ初夜の前の新婚カップルみたいな雰囲気なんですか？！」

「いえ、えーと、ティンプ（フェレット）に……」

彼は何度か術を使って、小梅さんの前で動物の姿になった話をしてくれた。

「えー……、ティンプって……そこで小さくなってどーすんですか。いや、確かに可愛いですけども……いや、そうじゃなくて！

いいですか、老婆心ながら言わせてもらいますが、”行ってきます”、”ただいま”のキスは恋人同士ならこれはマストです！ そして隙あらば三時のおやつ甘いキスを離宮の柱の影でもよろしくいくらいです！ カザムさん、女は男性に少しくらい荒々しい扱いをされるとキユンと来るものなんです！ 『いやよいやよも好きのうち』って、知ってますか？ 日本ではそう言う言葉があるんです

けどね。あ、まあ程度にもよりますけど、カザムさんと小梅さんがそれだけ好き合ってるなら、あ、あくまで私の見解ですが、けっこう押していいと思いますよ！」

とうとうと説く私に圧倒されたのか、カザムさんはちょっとフリーズ状態だった。そしてはっと我に返る。

「あ…はい。ちょっと、考慮させていただきます。それよりも、ルイさんはそういったことを、マドカさんに日常茶飯事で行っているんですか？」

「いやもうチャンスがあらばそれ以上。まあでも、普段はお互い仕事がありますから、そうでもないですけど、たまに昼休みとか呼び出されて何かと思えば『充電』とかやられますよ」

「は、あ…。それはさておき、マドカさんもルイさんも日本人、コーメと同じ血が通っているって、なんだかうらやましいですよ。俺はコーメの名前もちゃんと覚えてないですから」

カザムさんは控えめに微笑んだ。

あ…昨日の夕食のときの小梅さんの言葉を気にしてるのかな…  
「えっと、そういうのって、血のつながりとか同郷だとか…そりゃ共通点があると何も無いよりはお互いを理解しやすいように思いますが、そんなことないですよ！どれだけ相手を思っているか、どれだけ相手のことを知りたいか、自分を理解してもらいたいのか、コミュニケーションを取ろうというお互いの努力が無かったら、物理的なモノでの繋がりなんてまったく意味が無いです。ね、だからカザムさんもそんなこと気にしないで遠慮なく小梅さんに迫ってください！」

カザムさんの瞳の影がやっと晴れたのを見て、私は腰を上げた。

「カザムさん、そろそろシヨップングクイーンの血が騒いで来たんですけど。街に案内していただけますか？」

「よろこんで、お供します」

街でのお買い物は、私が自然療法に携わっていると言うと、彼は

ラズトさん御用達のハーブのお店に連れて行ってくれた。イリア・テリオでは手に入らないハーブティーをはじめ、種類も豊富で、他にもオーガニックの化粧品や石けんもあって私は大興奮。店員さんも公用語がばっちりで、たくさんあるハーブの効用など丁寧に説明してくれた。迷いに迷って何種類かのお茶と、石けんを購入。

こっちの通貨用意して来てよかった。ここに現金払い。

お店を出ると、カザムさんが荷物を持ってくれるって言ったけど、そんな滅相も無い！でも意外と男の人って頼りたいという気持ちもあるのかも。と、その後、帰るまでずっと上着だけ持ってもらった。郊外は風が涼しかったけれど、街は暑くて。

## 第五話

「ただいまー」

テラスからまどかさんの元気な声が聞こえて来た。日も暮れかけた頃だし、そろそろ戻って来ると思ってたのよね。

私は食堂でテーブルセットをしていた手を止めて外に出た。

丁度カザムさんとまどかさんはアンピイから下りるところだった。

「あれ？ まどかさん、アンピイに一人で乗ったんですか？」

「そうなんです。私、けっこう得意なんですよ。すっごく走らせちゃった。アンピイがちょっと可哀想だったかな」

彼女は上着のポケットに両手を入れたまま、肩をすくめた。あれ、なんだか一瞬だけどまどかさんの私を見る目に影がさしたような…

…？

「大丈夫ですよ、あれくらいではアンピイはくたばりませんから」

カザムさんはアンピイの首を軽く叩いた。

「そっかー！。じゃあ安心」

まどかさんはいつもの笑顔に戻った。うん、気のせいよね。それにしても、カザムさんと並んでアンピイを走らせられるなんて、うらやましい。

「まどかさん、お腹空きました？ もうすぐで食事の用意が整います。まどかさんの支度が出来たら、ルイさんと一緒に食堂にいらしてください。ルイさんはもうお部屋にいますよ」

「あ、じゃあシャワー浴びてから行きます。カザムさん、今日はありがとう！。また後でね！」

まどかさんは彼にひらひらと手を振った。あ、けっこう打ち解けて。まどかさんは人懐っこいからな……。って、私なにへこんでるの？ いけないいけない。へこみ、飛んでけっ！

「どうでした？ まどかさん、遠乗り喜んでました？ カザムさんも疲れたんじゃないですか？」

私は彼の近くまで行き、アンピイの鞍の金具を外すのを手伝った。  
「いえ、とても楽しかったですよ。俺も女性とこんなにくだけて話したのは学生時代以来かもしれませぬ」

彼にしては珍しく、本当に楽しそうにからりと笑う。

そ、そうなんだ……私という時は、結構無口なのにね……。

黙って手を動かしていると、ふとカザムさんがあたりを見回してから、私のうなじに触れた。

「？」

顔を上げると、カザムさんの顔が近くにあった。

「ただいま」

唇がふわりと触れあう。

えっ、まさかこれは！ 噂に聞く“ただいま”のキス！？ どうしたのカザムさん、離宮内でこんなことするの珍し……！

そのとき、ふつと甘い香りが私の鼻をくすぐった。

あれ？ これ、まどかさんの香水……？ アンピイには二人乗りしていなかったんだよね？ それでも二人はそんな距離まで、彼女の香りがカザムさんに移る距離まで近づいた、ってこと？

「……コーメ？」

黙って身体を離れた私の顔を、カザムさんが覗き込むようにする。

「カザムさんも、さっぱりしてきたらどうですか？」

微笑んだつもり私の声に、少し棘はなかっただろうか。

部屋に入るとルイがやっぱりデスクの前で書類に目を落としていた。

彼の姿を見たら再び、昼間の、彼と小梅さんとの会話が耳に蘇った。せつかく今日一日楽しい時間を過ごしたのに、またちよつと、落ちる。

「あ、お帰り。カザムと出掛けていたんだって？ どうだった？」  
ルイが顔を上げ、微笑んだ。何事も無かったかのようなあののん

きなルイの顔。ちよつとムツとくる。

「……楽しかったよ。すつごく。カザムさんすごく気を使ってくれたし」

「ああ、彼はすごくマメなヤツだよな。なんでも先回りして仕事を片付けるタイプだ」

ちよつと、なに冷静に分析してるのよ。じゃあ、小梅さんはどうなのよ。

私がい物の袋を寢室に置きに行こうと部屋を横切ると、彼は立ち上がり、私に近づいて来た。まだ何かあるのかな、と私はふと足を止めると、そのまま彼は後ろから私を抱きすくめた。

「おまえ、今朝機嫌悪かったの、あれ、オレが全然構ってやらないからだろ。ごめんな。今日は小梅のおかげでかなり仕事はかどったから、明日は少し時間が取れそうだ……そうそう、小梅が『まどか』と二人きりのときは何するの』って聞いて来てさ……困ったよ。二人きりでやることなんか決まってるのになあ。まあ、でも彼女には刺激が強そうだったから『映画に』って言うておいたけど」

そう言いながらゆるゆると私の体を撫で、いつの間にか胸が両手にすくわれていた。首筋を軽く吸われる。

小梅さんのおかげでそんなに仕事はかどったんだ。ふーん。彼女には刺激が強そうって、そうよね、私よりもずっと純情そうだもんね。何が映画よ。二人きりのときはいつもオレがまどかをベッドに張り付けて『ゆるして』っていうまで離さない、っていえばいいじゃない。なんで彼女の前でいい顔するのよ？

そう思うと一瞬で頭に血が上った。彼の、胸を包む愛撫の手が、首筋を這う唇が、他人のそれに感じて嫌悪を催した。私は彼の腕から逃れると、

「わ、私汗かいちゃったからシャワー浴びて来る。それに、もうタ

食だって」

「？」

いきなり腕を振りほどかれたルイはいぶかしげな顔をしてその場に立っていたが、私は背を向けてそのまま寝室に入った。

だめだめ、落ち着かなきゃ。二人の間に何かあったわけじゃないんだから。……何かって？

その夜も夕食を4人で和やかにとり、私は前日のようにルイより早くベッドに入った。

カザムさんが夕食のときに約束してくれたもん。明日もまた好きなどころに案内してくれるって。

私はベッドの思いつきり端に横たわり、まぶたを閉じた。

今日は朝からレモニーナさんが来て、ルイさんは昨日までにたまった疑問点をぶつけまくっている様子。私はその間に、まどかさんに庭のツリーハウスを案内しながら、話に花を咲かせていた。

何だか、今日もまどかさんは時々ため息をついてたけど、話しかけるとニコリとおざなりでない笑みを返してくれる。真っ直ぐな性格が現れた、素敵な笑顔だ。

そんなまどかさんを見ながら、昨日のルイさんの提案　まどかさんがカザプカを通じて地球と連絡を取れないかと言う　について　考えているうちに、私には気になり始めた事があった。

レモニーナさんが帰って行った後で、ルイさんに昼食を運んで行った時、やはりカザプカの話になった。

「あの、ルイさん」

私は聞いてみる。

「まどかさんは、こちらを選んで地球に帰らなかったんですね。でも、連絡が取れたら…また、迷ったりはしないでしょうか」

ルイさんが、椅子を回してこちらに向き直る。

「小梅は、迷っているのか？」

「迷うどころか、私は心の一部は日本に置いたままです。私が日本に残してきたものは命より大切なものだから、私自身が納得してそうしているつもりです。ただ、こちらに来てすぐに、こちらにも大切なものができてしまったから、とても…切ないけれど」

あ。口にすると泣きそう。

私はぐつと堪えて顔を上げた。

「だから、まどかさんが日本の誰かともう一度つながりを持つことで、辛い思いをするんじゃないかって…」

ルイさんは立ち上がると、私の横に立って軽く背中を叩いてくれた。背が高いので、それだけで何だか包み込まれるみたい。

「ありがとう。そうかもしれないな。でも、連絡の手段があると知っていて隠すのはフェアじゃないような気がして…」

見上げると、ルイさんはふつと笑って、

「もしかしたらオレは、まどかにそれを教えて、もう一度オレを選ばせたいのかもしれないな。まどかはつれないから、時々愛情を確かめたい」

「…ルイさんは、そうできるくらい、まどかさんを信じてるんですね」

それに比べたら、私はダメだ。

そう思ったら、いきなりぼろつと涙がこぼれてしまった。

「小梅」

「う、あ、ごめんなさい。でも私、カザムさんに、ちつとも応えられなくて」

こんな話、他の人にはしたことないのに、私は胸の内を素直に打ち明けていた。

「…好きなのに、いつか、信じてもらえなくなるかも…」

ぐしぐしとハンカチで目元を拭いていると、ルイさんが私の肩に手を置く。

「そうか……小梅はそんなに苦しんでいるのか。それじゃあ本当にまどかが辛い思いをするってこともあり得るんだな……オレ、少し成り上がっていたかも。まどかがオレを選ぶって。信じているというよりもうこれは”願<sup>がん</sup>”に近いな。うん。小梅、オレはなんだか不安になって来たぞ」

さっきまでの余裕はどこへやら、私の前で腕を組んで目を閉じて考え込んでしまったルイさんを、私は呆気にとられてみていた。と、突然目を開けたルイさんと思いつきり視線が合う。わ、びっくりした。

「まあ、それはそれで出たとこ勝負だ。でもな、小梅。カザムは君に答えを出して欲しいわけじゃないと思う。日本かこっちか。娘さんかカザムか。彼は迷っている君ごと包みこみたいと思っているはずだ。いや、カザムだけではなくてオレだってまどかに対してそう言う気持ちをもっている。だからたとえ今君が迷っていても、迷いのある君も君なんだから、甘えたいときは遠慮せずに思い切り彼に甘えるべきだ。彼もそれを望んでいるはずだよ。それが君の、彼に対する”応え”だよ。たとえ万が一、小梅が日本に戻ることになったらとしても、それを裏切りとかそんな風に思う男じゃない。もつと彼を頼るべきだ。それともカザムは小梅にとってそんなに頼りない男なのか？」

私はぶんぶんとかぶりを振った。ルイさんはそつと私の両手を取って、ずつと近くで瞳を覗き込んだ。

「こ、こんな泣きはらした顔、見ないでー」。

「それでも小梅みたいな可愛い女性が目の前で泣いていたら、つい、慰めたくるのが男つてもんだぞ？ どう？ オレに慰めてもらいたい？ それとも……」

ルイさんはちよつと意地悪く口の端だけ上げて笑った。

「……カザムさんに、慰めてもらいたいです」

またぼろぼろと涙がこぼれる。今度は、悲しくて泣いてるんじゃない。ここにいない彼が恋しくて。

「だろ？ ああ、君のカザムは悪いがこの時間、まどかが独占して  
るな。帰って来たら嫌ってほど甘えるんだな」

ぼん、と彼は私の頭に手を乗せた。

「ありがとう、ルイさん……」

どうにか涙を止めて、笑う。まどかさんも幸せだな……こんなに頼  
りがいのある恋人がいて。

「あゝみつともないな、私ちょっと目を冷やしてきますね。それか  
らすぐに仕事を片付けてしましましょう！」

恥ずかしくなった私は、ぱっと身をひるがえして部屋を出た。

## 第六話

私は、ルイの作業部屋が見える廊下の角にいた。彼は今日も小梅さんにアシストをしてもらうって喜んでた。それは純粹に仕事がかどるからなのか、別の意味でなのか。……邪推し過ぎだ。私。

ちよつと顔見に来たんだけど……いいよね。何だか昨日から気まずいし、今日も朝食後から一度も顔を見てないし。小梅さんとどんな雰囲気の仕事してるのかも見てみたいし。きつと、見てみたら何てことないのよ、うん。

その時、急にドアが開いて小梅さんが出てきた。

後ろ手にドアを閉めた小梅さんは一度立ち止まると、ぐすんと鼻を鳴らした。そして顔を上げて大きく息をつくと、向こうへ去っていった。

目が、赤かった。…泣いていたの？

私はまた混乱した。

ルイと小梅さんが一つの部屋にいて、小梅さんが泣く。それってどういう状況？

ルイの胸で小梅さんが泣いている所を想像したら、頭にカツと血がのぼった。

私は踵を返すと、離宮の正面入り口に向かって走った。石段を降りて車寄せを出ると、ちよつとそこへカザムさんが、アンピイの手綱を引いて歩いて来た。

「あ、マドカさん」

私はつかつかと大股でカザムさんの前まで歩み寄ると、彼の持つアンピイの手綱を奪った。そして、何事かと驚く彼を尻目にそれに飛び乗ると、一言だけ

「カザムさん、今日は飛ばしますから！」

アンピイの腹に踵を強く食い込ませると、蹄は勢い良く地を蹴っ

た。

ただ、思い切りアンピイを走らせた。何も考えたくなかった。道なんてわからなかった。いつの間にか追いついて来たカザムさんが隣に並んでいた。それでも私はスピードを緩めることもせず、ただ耳の横で風が鳴る音だけを聞いていた。どのくらい走らせただろう。気がつくとき昨日ピクニックをした川のほとりに来ていた。私はやっと手綱を引き、アンピイを止まらせるとその背から滑り降りた。カザムさんも獣から降りて、二頭を川へ引いて行き、水を飲ませた。彼らをそのままにしてカザムさんは私の隣へ来ると、「まあ、座りましょう」と草地へ促した。

「一体どうしたって言うんです」

カザムさんは水のボトルを私に差し出した。私は喉を鳴らしてそれを飲み、彼に返す。彼もボトルを煽った。

「今夜は離宮には戻りません。ルイと会いたくないんです」

「それではどこで寝るんですか？」

「一人でホテルにでも部屋をとります」

「でも、どうしていきなりそうなるんですか」

「だって……」

私はカザムさんに一部始終を話した。昨日の会話のことから、さつき見た小梅さんの涙に濡れた顔のこと。小梅さんと会ってからルイの様子がなんだか変なこと。

「小梅さん、可愛いし、私と全然違ってすごく女性らしくて。私みたいに、思ったことはすぐにぼんぼん口にしないし。ルイが心変わりしないって誰が言えます?! だいたいルイは狙った獲物は逃さない男ですから、カザムさん、こんなところで私の相手をしている場合じゃないですよ?」

カザムさんは大きなため息を一つついた。そして私に向き直る。

その顔には険しいものが浮かんでいた。そのうえ極力感情を押さえつけたような声で言った。

「マドカさん、あなたはルイさんがここに何をしに来ているかわか

っていますよね？　バーシスを代表して、レモニーナ先生の教えを十分受けるに値する人として派遣されて来ているんですよ。たとえコーメがルイさんの目に魅力的に映ったとしても、公務と私情を混同させるような人ではないと、俺は思っています。彼はそんな頭の悪い男だと、マドカさんは思いますか？　あなたがもつとルイさんを信じてあげられなくてどうするんですか。それともあなたたちはすぐに相手を疑ってしまう、そんな浅い関係なんですか」

「でも……」

その後には言葉が続かなかった。カザムさんの言うことはもつともだ。私は俯き、唇を噛んだ。

カザムさんはそんな私が可哀想に見えたのか、そつと肩に手を置いた。

「……まあ、昨日の会話は多分なにかの誤解でしょう。なんとでも取れます。でも、コーメが泣いていたのは聞き捨てなりません。わかりました。少しルイさんを罫にかけられるくらいこの場合、許されてもいいかな……」

と、カザムさんは一人で何やら納得している様子。罫？　カザムさんは何を考えているんだろう。

彼は短く口笛を吹き、森から出て来たポステを肩に止まらせてメツセージを書くと、その小さな相棒を送り出した。

「さあ、コーメにもメツセージを出しましたし、行きましょう。お見せしたいものがあります。ああ、その前に近くで何か食べるものを調達しないと。あそこには何もありませんから。腹が減っては戦が出来ませんし、時間はたっぷりあります。ルイさんが痺れを切らすまでの、ね」

そう言っカザムさんは、普段の彼に不似合いな策士の笑みをうつすらと浮かべた。

ひえー、カザムさん、一体どんなメツセージを書いたの？！

ルイさんに励ましてもらった私は、何だか心が一段階強くなったような気分で、カザムさんに想いを馳せながらルイさんの手伝いをしていた。

ルイさんが使い終わった資料を博物館に返しに行った帰り、カザムさんとまどかさんはどうしたかしら…と思いつながら渡り廊下を歩いていると、オレンジ色の姿がツイーツと私の周りを半回転し、腕にとまった。

ポステが手紙を持ってきてくれたのだ。

足についている通信筒を開けると、くるくると丸められた小さな紙きつとカザムさんからだ…今どこにいるのかな。

目を通した私は、一瞬その意味を理解できず、頭の中が真っ白になった。

『コメへ ルイさんに伝えてください。今夜はカザムが、マドカさんを帰さないよ。モリオ』

のどに何かが詰まるような感じがした。

…何、これ。どういう…こと？

ショックな文面なんだけど、同時に私は大きな違和感を感じた。フリーズしそうになる思考を懸命に動かす。

…もしも、カザムさんが、まどかさんに心奪われたとしても。それを私にこんな形でわざわざ伝えるなんて、まったく彼らしくない。このメッセージは変だ。

そしてやっと、一番最後の“モリオ”の文字に意識が行った。

私がこの世界に来て、まだカザムさんがカザムさんだと知らなかった頃。その時の状況から私がつけた彼の呼び名が、“森男”だ。それ以来、私と彼の間でだけ、その呼び方が使われることが時々あった。

『俺はあなただけの森男ですから』

そう言ってくれたのを、忘れるはずがない。それなら、このメツセージには何か意味がある。

そこに思い至れば、次の思考にたどり着くのは簡単だった。

やっぱり、まどかさんの様子が変わったのは気のせいじゃなかったんだ。ルイさんのことで、何かあった。それでカザムさんが、こんなメツセージを…。きつとそうだ。

私はおへそのあたりに力を入れ、ぐつと顔を上げた。

皮肉なことに、さつきルイさんに励ましてもらった私は、カザムさん無条件で信じている。だから、彼に何か意図があつてこんなメツセージを送ってきたのなら、私がやることは一つ…裏があると知ってても、ルイさんが怒るとわかってても、ルイさんに伝えること。

でもそれはきつと、『地』が固まるための『雨』なんだと思うから。

心を決めた直後、いきなり後ろから声がした。

「あ、カザムからの連絡？」

「どひー！」

変な声を上げて振り向くと、ルイさんが立っていた。眼鏡を外し、眉間を揉んだり首を回したりしている。仕事が一段落したらしい。

「まどかとカザム、どこに行ってるって？ 今日少し時間が取れるって、あいつに言つてあつたんだよね。できれば合流しようかな」

「あつ、あの…ね、ルイさん…」

演技なんか必要なかった。うるたえた私は、カザムさんからの手紙を、ルイさんに差し出すんだか差し出さないんだかわからない、中途半端な位置に持ち上げる。

ルイさんは無造作に手紙を手にとると、さつと目を通した。

ぴき、と空気にひびが入る音を、私は確かに聞いた。

「そ、それ、きつと何か意味が」

「何かって？」

声が変わった。怖い。ルイさん怖い。

「ねえ、小梅。これ、何かの冗談？ 冗談でもオレ笑えないんだけど。それとも何？ これってバーシスの軍人を試すプログラムかなにか？ 『人さらいの現場に立ち会った場合どう行動するか』とか？ おたくの護衛士、人さらいの訓練までするの。まあ、人質を取れば敵側は手も足も出ない場合だってあるもんなあ」

こ、怖いっ！ ルイさん、口調は穏やかでも瞳の温度は氷点下！  
ドライアイスの白い煙みたいな幻覚が見える。そばにいるだけで凍傷になりそう。

私は彼の怒りの迫力に一步退いた。彼は静かに私に近づいた。

「ほんと、場合に寄ってはバーシスがなんとかしないでもないよ？ この美しいウイオ・リゾナがどうにかなっちゃうかもしれない」  
ええっ、それって宇宙戦争とかそういうのですか？！ そういえばこの方は、研究者なのと同時に軍人さんで、カネラ（大佐）の称号を持つ人だった！

ちよ、待って！！ 違うの！ これには訳が……たぶん……て、言  
ったところでルイさん、もう聞く耳ないよね……もう、だめだ。

人の怒りは、すごいパワーを生む。その波動を間近で受けた私は、  
数秒しかもたなかったよ。もうちよつと引つ張ろうと思ったのに、  
めんねカザムさん！

「る、ルイさん、私、二人のいる所に、急に心当たりが！ アンピ  
イ乗れますか、私を乗せてって下さい！」

うう、私は人をだますのはホントに向いてない。

## 第六話 (後書き)

第四話でカザムとまどかの会話に出てきました『ルイの充電』にまつわる話を「ムーンライトノベルズ」Elysiumのおまけ小話として載っております。やや濃いめに仕上がっております。よろしければ是非ご賞味ください！

## 第七話

カザムさんは両開きのドアのカギを外すと、

「どうぞ」

と開けてくれた。私は中に入ってあたりを見回す。

玄関ホールは吹き抜けになっていた。天井は木の梁が見えていて、床と壁の下半分も板張りになっていて温かみがある。

「ここは、ジエガルト家の…ラズト先生の別荘です。この夏は誰も使わないので、俺が自由に使っていいことになっています。ゆっくりして下さい」

石造りの暖炉のある部屋に通され、カザムさんが窓を開けて風を通しながら言った。ソファにかかっていた白い布もどけてくれる。

「ありがとう…」

ソファに座り、ため息。

ボーっとしているうちに、カザムさんがお茶を淹れてくれた。温かな湯気が胸にじんわりと浸み込むにつれて、ささくれ立っていた気持ち少しだけほぐれてくる。

勝手に離宮を飛び出してきちゃったけど、ルイ、心配してるかな。

…全然気づいてなかったりして。今ごろ小梅さんと…。

「カザムさん、あの…お話聞いてもらってもいいですか？」

「もちろん。俺でよければ」

彼は私の方へ体を向けて深々とソファに腰掛けた。

「え…と、ルイって私に『ダメだ』って言ったことが無いんです。なんでも許してくれる。私が何をしようと何を言おうと。そりゃあ常識の範囲ってありますから、私も度を超してひどいことをしたり、言ったりしませんけど、彼は本当になんでも許してくれるんです。でもね、それって裏を返せば『どうでもいい』ってことなのかなっ

て思うときもあるんです。だって、人に何かを注意するよりも『いいよ』って流していた方が楽っていうのありませんか？ だから、たまに不安になるんです。私ってルイにとってそういう存在でしかないんじゃないかと。だから、小梅さんみたいな、可愛くて守ってあげたい『ああ、俺がいなきやだめなんだな』タイプの人がルイにはお似合いかも、と思ったら、つい取り乱してしまつてカザムさんはソファの背に体を預けて、私の話を黙って聞いていたが、「ふーん」と鼻を鳴らすと、すぐに微笑んだ。あれ？ 変なこと言つたかな。

彼は咳払いをして、

「すみません、うまく言えるかわかりませんが……」  
と前置きをしてから言つた。

「まず一つ、断つておきたいのは、コーメは確かにほわんとして見かけは可愛い女性ですが、あれでなかなか一筋縄ではいきません。ここだけの話、俺が尻に敷かれているといつてもいいくらいです。あ、これは俺が彼女に夢中だから、というのを差し引いても、です。ラズト先生もたまにですが彼女にこき使われていることもあるくらいですからね」

あ……味噌と、シヨーユ？

「ルイさんの気持ち、俺わからないでもない、ですね。多分、それ、ルイさんの方が不安なんだと思う。マドカさんがどこかに行つてしまふんじゃないかと。自分の側にいることで制限されたり、不自由な思いをマドカさんにしてもらいたくないんじゃないかな。だから、ルイさんがマドカさんに何か強要することってほとんどないんじゃないですか？ 本当だったら、もし普通の男だったら、自分の惚れた女を縛り上げて家に閉じ込めて鍵かけるくらいしておきたいのが正直なところですよ。あと、おしゃれして出掛けるな、そんな露出の高い服を俺の前以外で着るな、他の男に“星心印”での名前教えるな、そんなニコニコするもんじゃない、たぶん、基本これくらいは毎日言いたいはずですよ、特に彼なら。あ……あくまで俺の見解

ですけど」

カザムさんの言うこと、本当なのかな。そしたら、私がルイを誤解している、ってこと？　こんなに一緒にいても、彼のことがわかっていない、ってこと？

「マドカさん」

顔を上げると、カザムさんがテラスに出るガラス戸の前でこちらを見ていた。

「ちよつと、庭に出ませんか」

そうよね。こんなむしゃくしゃした人間と部屋にこもっても、気づまりなだけよね。

のろのろと立ち上がり、カザムさんに近寄ると、彼は外を指さした。

「ここに来たのは、あれをお見せしたくて。日本のものです」

「？」

庭にはすでに薄闇の帳が下りていた。あまり手入れのされていない自然の庭を、部屋からこぼれた灯りが照らしている。

そして、庭の奥に見覚えのある木があった。近づいてみる。

「これ…梅の木！」

鈴なりになつた青い実は、ほんのりと黄色や赤に色づき始めて、甘い芳香を放っていた。懐かしい香りを胸一杯に吸い込む。

「日本のものに触れたら、少し落ち着くかと…それだけなんです」

カザムさんがウッドデッキの段差に腰掛けた。私も隣に座らせてもらう。

「俺の話も、少し聞いてくれますか。…この木、“星心術”で日本から呼び寄せたんですよ」

説明してくれたところによると、小梅さんのこちらでの名前を“星心印”で表現するために必要だったそうだ。

「でも、名前を得て、神にこちらの世界の人間と認められた時、コメは…辛そうに泣いていました」

そうか…娘さんが日本にいるのに、つながりを断ち切られた気が

したのかな。

「俺がコームを求めたから、コームは俺に伝えてくれた。でも、コームにとって、もしかしたらこちらでの恋愛は重荷かもしれないと思うことがあります」

カザムさんは静かに語る。

「彼女は、日本に心を残していることを、俺に悪いとさえ思っているかもしれない。でも、俺はそんな彼女だから好きになったんです。コームはこちらの生活ですごく頑張っているから、恋愛でまで頑張らなくてもいい。俺が隣にいて、彼女を支えられれば、それだけで幸せなんだって、いつか気づいて欲しい」

カザムさんは目を細めて笑った。

「そもそも、空間を超えて彼女と出会えた、それだけで俺は奇跡みたい嬉しいから」

カザムさんはまるでそれが小梅さんであるかのように、枝を広げている梅の木をうつとりと見上げた。その眼差しには柔らかな光が浮かんでいた。まるで小さな星たちがその瞳に降りてきたような。

……カザムさんは、小梅さんのことを本当に大事に思っているんだわ……

私は自分が告白されているわけでもないのに、どうしてか胸の奥がきゅつと痛んだ。なんだか、ルイを疑っている自分が馬鹿みたいに思えた。同時に恥ずかしかった。そして……

「……ルイに、会いたくなっちゃった」

カザムさんはゆっくりと私を見下ろす。慈しむような、包み込むような微笑みで。『わかってますよ』彼の無言の声を聞いた。

「カザムさん、ありがとう。こんな私の茶番に付き合ってくれて。話まで聞いてくれて。私、もっとちゃんとルイと向き合ってみます……つい長居しちゃったけど、もう行きましよう。小梅さんもさすがに私たちのことを心配しているだろうし」

私は立ち上がり、お別れの気持ちを込めて、ころころとした梅の実を付けた枝をもう一度見上げた。

「あつ、痛いっ」

「どうしました?」

「なんか目に入ったみたい。何か動いてるうー」

「あ、ここは夜、羽虫が多いんだ。ちよつと見せてください……明かりが欲しいな。うん、体を部屋の方に向けて……」

カザムさんが家を背にして私の前に立つと、私の頬に手を添え、親指の腹でぐつと目の下を抑えた。うっ、恥ずかしい……こんな素敵な男性に……このまま舌を出せばアツカンベ―状態の顔を見られるなんて……、って、何考えてるの私。

「ちよ……頭振らないでください、マドカさん。あ、見えた。取りますよ」

彼はもつとよく見ようと顔をぐつと近づけた。

わわわ、息が掛かった。近い近い……。

そのとき、その見開かれた瞳に、家の方からすごい勢いでこつちに向かってくる人影をとらえた。その後ろには小梅さんの姿も……! 「カザムっ! てめえっ! まどかに何してる!!」

きゃーーっ! ルイ?! なんで?!

ルイは一直線にカザムさん目がけて、ぐんと距離を縮め、彼の後ろから今にも拳を振り下ろそうとしている。

「ルイ! ちよつと、やめーー」

私が言い終わらないうちに、目の前にいたカザムさんはひらりとその身を軽やかにひるがえし、自分の顔の前に迫った拳を手のひらで「ぱしっ」と受けた。

さ……さすが国の護衛士……

その一連の優雅な動きに目が釘付けになる。って、まだ虫入ってるけど。

寸でのところで攻撃をかわされたルイは、まだ拳をとらえられたまま、怒りで顔を歪ませながら正面に立つ美丈夫を睨みつけている。

カザムさんは眉一つ動かさず、そんなルイの視線もどこ吹く風、で静かに言った。

「マドカさんの専属騎士ナイトがご不在のようでしたので、俺が代わりにお世話させていただいたままでです」

え、カザムさん!?

「どんな世話の仕方だよ……っ、オレはそんなことを頼んだ覚えが無いが……?!」

ちよ! ちよつとこの人ものすごく勘違いしている!! なんかこれじゃあ一人の女を取り合う二人の王子の図!! しかし残念! 根本的に「誤解」ってところが恥ずかしい!!

私は急いで二人の男の間に――ほとんど隙間のない――に割って入った。

「ルイ、カザムさんに失礼よ! その手を引っ込めて!!」

「なんだ、まどか。おまえコイツを庇うのか?!」

殺気120%の視線で上からぎろりと睨まれる。

「ちがう……ルイ、誤解よ。目に……目に虫が入ったの! ていうかまだごろごろしてる! せつかく取ってもらったのに誰かさんが邪魔するから……!!」

「早く取って差し上げたらいかがでしょう」

ふっ、と軽く息を吐きながらカザムさんはルイに言った。ルイはカザムさんからしぶしぶその身を離すと私に向き合い、頬に手を添えた。今まで殺気の含まれていたそれは、今はウソのようにとても優しい。

「……取れたぞ」

「ありがとう……?」

目の異物は取れたのに、ルイは両手で私の顔を挟んだまま私の瞳を覗き込んだままだ。私も思わず彼の栗色のそれを見つめる。

「なんか、ずいぶん長く会わなかった気がする……」

あ、それ今私も思った……

ルイの顔が近づく。私はまぶたを閉じる。そのタイミングですくわれる唇。もう、何度も何度も何度も繰り返してきたこと。それなのに、どうしてかすごく愛しい。

ちゅ、と吸われて唇が少し、離れた。

「…………ごめんね、私、ルイのことちよっと疑ってた…………いつも私だけを見て、なんて…………我がままだよね」

ルイは困ったように笑みを浮かべた。

「オレがおまえを我がままにしてるから、いいんだよ」

ぎゅっと抱きしめられる。私も迷わず彼の背に腕を回す。私は彼の胸に顔を埋めて息を大きく吸う。ルイの香り、ルイの体温。やっぱりルイじゃなきゃダメだ…………。

## 第八話

やっぱり、ここだった。

ルイさんとアンパイに二人乗りをして、ラズトさんの別荘に着いた私は、厩舎にもアンパイがいるのを見て胸をなでおろした。カザムさんが私を通じてルイさんをおびき寄せようとしてるなら、案内役の私のよく知っている場所に行ったのだろうと思っただ。

ルイさんがすごくアンパイを飛ばすので、しがみついていた私は身体がガクガクだったけど、とにかく不穏な空気をまとったままの彼を中に案内する。鍵の開いた玄関を抜け、暖炉の部屋をのぞくとテラスに出るガラス戸が開いていた。その向こうから、カザムさんとまどかさんの声がする。

何の警戒もせずにガラス戸を抜けた私は、その場で立ちすくんだ。

梅の木の下にはこちらに背を向けたカザムさん。そしてその影になるようにまどかさん。カザムさんの頭がまどかさんの顔に重なって……

「うそ……」

思わず口から言葉が漏れた。自分が見ているその光景が信じられなくて、足がすくんで動けなかった。だって……カザムさん……まどかさんに……？

隣で風が舞った気配に顔を上げると、ルイさんがすごい勢いでカザムさんの背に突進していくところだった。

「ル……ルイさん……」

止めようとして上げたはずの声がかすれて届かなかったのか、ルイさんはカザムさんに襲いかかった。カザムさんは難なくそれをかわす。私はその間に恐る恐る彼らに近づいた。

「……目に虫が入ったの！……」

まどかさんが片目を閉じたまま、ルイさんを見上げる。

めに、むし！ な、なんだ…そんなことだったの…。

彼女の言葉を耳にしたとたん、ふっと体の力が抜けた。あ、あれ？ どうしたんだろ？

そんな私の体を温かい腕が支えた。そのまま、すつと引き寄せられる。

「あつ、ご、ごめんなさい。なんかほつとしたら急に力がぬけちゃって……」

言い訳のようにもごもごと口の中で言葉を嚙んだ。なんだか恥ずかしくて、私を包むその人に顔を上げられない……たぶん、私いままごく変な顔をしていると思う。安堵と喜びと恥ずかしさが入り交じった…… そんな風に思うもつかの間……

あ……！ ほわあああ！ る、ルイさん、まどかさんにキス……しちゃった……も、もう完全に二人の世界だよね！ 人のキスシーン見るなんて、妹の結婚式以来だよ！ いいですか見ても、つてもう両手で顔を隠しても指の隙間から見ちゃってたり。こ、この距離だし、見るなという方が、ねえ？ って私、誰に言ってるんでしょう。

「オレがおまえを我がままにしてるから、いいんだよ」

って！ ルイさん！ なんてセリフですか！

でも、この目、この声、この表情…こんなにも気持ち伝えて、胸を打つセリフ。

いつもお笑いになっちゃうどっかの誰かさんとの違いは、一体何なのさ！？

そして今、まどかさんとルイさんがお互いの身を寄せ合う……よかった。仲直りだ。やっぱり、お似合いの二人だなあ。

「コーメ。そつちばかり見てないで。…どうしてほつとしたんですか？」

後ろから私を抱きすくめる手に力がこもり、私は我に返った。とくとく、と背中に彼の鼓動を感じる、気がする……そして温かい息が耳にかかった。私は思わずその腕に自分の手を重ねる。

どうして、って……だって……

「それは、コーメが俺のことで少しでもマドカさんに妬いた、って勘違いしてもいいですか」

か、勘違いっていうか、ごめんなさいビンゴです！

でも、やっぱり何も言えなくて、ただ、コクン、と小さく頷いた。ふつとカザムさんの腕の力が緩んで、そのまま腰をくるりと回され、その瞬間私はもう彼の胸に顔を埋めていた。

「か、カザムさん、恥ずかしい……まどかさんとルイさんが……」

「いませんよ」

「へ！？」

思わず彼の顔を見上げる。一途なダークグリーンの瞳と会う。

「よかった。やっと俺の目を見てくれましたね」

「え……と……あ、それより二人は……」

カザムさんは優しく目を細めた。

「俺たちに気を使って、部屋に入って行きましたよ」

カザムさんは私の頬に頬をすりよせた。うわああ。

思わずいつものように、関係ないことを言っただけかわそうとして。

私は思い出した……ルイさんに「帰って来たら嫌ってほど甘えるんだな」って言われたこと。それにさっきの、素敵なルイさんのセリフ。

私も、もうちょっと我がままになってもいいのかな。

「ね……森男……？ 我がまま言っただけ？」

私だけのあなたの名前を、呼ぶ。

「はい？」

「帰りは、私と一緒にアンピイに乗ってね」

「……はい」

カザムさんが、短いけど雄弁な返事をしてくれる。

「それ、から…いつか、この庭でしたこと、もう一回、して？」

見上げると…カザムさんは何かを我慢するように、かすれた声で言った。

「『して？』ってコメ…それは我がままじゃなくて、おねだり、って言うんですよ」

そしてカザムさんは、いつかのキスとは全然違う熱さで、私のおねだりを聞いてくれた。私はまた、身体の力が抜けそうになった。

「あの一、お腹空きませんか？ ここに来る前に買って来たもの、つまみませんか。お茶の準備は出来ていますし」

がば、とカザムさんの腕越しに振り向くと、まどかさんがおすおすどガラスの引き戸の向こうから顔をのぞかせていた。

ぎゃあああ！ すみません！

居間の暖炉の前のソファに、テーブルを挟んで二組のペアが向かい合うように座る。

夏だからもちろん暖炉に火はついてないけど。テーブルの上には出来合いのコールドチキンサラダ、何種類かのチーズとカゴにはバゲッドがスライスしてある。ラストさんが冷蔵庫に常備しているハーブバターとナッツのペーストもパンの横に並んでいた。

「私、安心したら急にお腹空いちゃったんで、遠慮なくいただきますよ？」

まどかさんが飾り気の無い微笑みを浮かべながら、サラダを皿に取った。

「……おつまえ、本当に現金だよな。自分の恋人ながらいい性格しているな、って思うよ。ああ、”性格がいい”じゃないからな」

ルイさんがソファの背に肘をつき、頭を支えながらまどかさんを横目で眺める。

「でも、好きでしょ？」

あ、まどかさん切り返した……パワーアップしてるわ……

「う……、ま、まあな」

ルイさんは一瞬赤くなつて、でも彼女の言葉に応えた。私はつい吹き出してしまふ。隣を見上げた視線が、カザムさんの穏やかなそれと合った。

簡単に食事を終わると、カザムさんが皆に新しくお茶をいれてくれる。

「で、なに？ この一連の騒動はつまりおまえが、このオレが小梅になびいた、と完全に勘違いしたことが発端なわけだな。そのうえカザムが一枚噛んだ、と」

「俺は得てして女性の味方ですからね。それに惚れてる自分の女が他の男の前で涙を見せたなんて聞いたら感情的にならないわけがないでしょう」

押さえた声音。うそ、カザムさんちよつと怒ってる？

「あつ、それはね？ カザムさんがこんなに私のことを大事にしてくれてるのに、私が少しもそれに応えていないんじゃないかって思ったらいろいろ込み上げて来ちゃって……ルイさんを困らせちゃつて」

私がかザムさんの顔を覗き込んで必死に弁解すると、彼は私の体に腕を回してぐつと引き寄せた。その瞳が憂いを帯びている。

「そんなこと知らなかったもん。それじゃあ私だって、誤解もするよ！ あんなにタイミング良くあんなセリフを聞いたり意味深な泣き顔みちゃったら！ どうせルイがちよっかい出したんだなっと思う方が自然でしょうよ！」

まどかさんがやや怒り爆発気味にルイさんに噛み付いた。逆ギレっていうの？ こういうの。

「おまえ、オレのことなんだと思ってるんだ?!」

「狩猟系絶倫男」

「ぶつ」「ぶつ」

今まで神妙だったカザムさんと私は思わず同時に吹いてしまった。わー、そんなに飛んでないけど失礼しました！ ていうか、あまりに肉的を射すぎた言葉にヒットしてしまった！ うん、ルイさんにはやっぱりまどかさんしかいないわ！ 知り尽くしていることがわかるセリフだもん…… って、あれ、私もそんな風に彼を見てた？ 「おまえっ！」

ルイさんが横からまどかさんを抱え込み、拳でこめかみをぐりぐりする。うー、あれ痛いんだよね。

「だって私に対する普段の行動からすればそうじゃない！ いたた。もう！ ごめんなさい！ 私が勝手に妄想膨らましてました！ ルイに疑惑持ちました！ 嫉妬してました！ 好きなんだもん！ しょうがないじゃない！」

あ、そんなにあっさりと言えちゃうんだ…… まどかさん、可愛いっ。って、私がかきゅんきゅんしてどうする。

ここでやつとルイさんが『ぐりぐり』をやめて、彼女を抱きしめた。「その狩猟系絶倫男とやらはおまえ限定だから」そつとこめかみにキスをする。まどかさんは照れながらも、唇を尖らした。

「もー、やだ、私。30過ぎててもこんな落ち着かない恋してるなんて」

「でもルイさんみたいにセクシーな人が隣にいたら、のんびり恋を乐しむどころじゃなさそうな気がします」

「え、なに？ 小梅までそんなこというの？ それ、褒めてんの？ それでもそんなオレを振り回してるのはまどかの方なんだけどな。そんなにおまえが落ち着きたいなら、オレはそろそろ落ち着いてもいいぞ？ ていうか、そうしてくれた方がオレは安心だな」

「……！」

「ルイさん、それって！」

私はつい、カザムさんの袖をきゅつと握ってしまった。これって、これって……カザムさんは感心したようにただ一言。

「ほう、そう来ましたか」

「まあ、別にまどかがオレとそう言うのを望んでいれば、だけど。人によるだろ。そればかりが幸せじゃないだろうし」

「そうやって、すぐに人に選ばせるっ」

まどかさんは上目でルイさんを見る。でも、なんとなくその横顔が嬉しそうなのは私の気のせいじゃないと思う。

「だってオレが決めていいなら、即決なの目に見えてるじゃないか」  
「あー、なんだかずいぶん当たられているような気がするなあ。いいな、いいなあ。」

うらやましいのと同時に、どこか切ない気分でそんな風に思っていると、隣ですつと私を抱いていたカザムさんのその手に、きゅつと力がこもった。

「それにしても、一体なんだったんですか？ コーメとルイさん、実際なにかコソコソしてましたよね？」

あ、バレてましたか。でもそれってカザムさんが私のことをよく見ていてくれる、ってことだよ……そして、私を信じてただ見守っていてくれた。なんか、すごく幸せだな……。

「うん、そのことなんだけど」

ルイさんはカザプカの説明を軽くまどかさんにした上で、彼の小さな企みを暴露した。

「え？ 今さら日本と連絡……って。あり得ないでしょう！」

まどかさんは話を聞き終わると一笑に付した。ルイさんはちよつと肩すかしを食らった様子をしている。

「だって、小梅さんみたいに大事な娘さんを残して来ているならともかく、私の存在は向こうに全くないんだし、そうねえ、一人連絡とつてもいいかなって男トがいけないこともないかな……」

「おまつ！ それって……」

急に取り乱すルイさん。あの様子じゃ恋敵かしら……。

「ウソよー。いいの。私はこっちを選んだんだから、何があっても連絡なんかしないわ。だいたいそんなことしたら里心ついて帰った

くなっちゃう。でも……ルイは私のことを考えてくれたのよね。ありがとう」

二人が見つめ合う。あっ、あっ、またキスしそうな引力を感じた。リンゴが落ちるくらい、自然な引力を。

## 最終話

「さて、と。まどか、行くかうか」

「え？ でも、片付け……」

急に立ち上がったルイは、強引に私の腰を抱くようにしてガラス戸から庭に出た。カザムさんと小梅さんが、あわてて後をついて来る。

ルイはそのまま厩舎に入り、アンピイの手綱を手に取った。

「今日はもうこちらに泊まられては？ 部屋は十分にありますし。

明日皆でもどりましょう」

ルイはアンピイの上からその首に手をかけているカザムさんに顔を寄せた。

「カザム、オレとまどかはこれからちよつと二人だけでやることがあるんだよ。空気読め？ ていうか、君たちはどうなのー？」

そ、そんな挑発の仕方って……！ あ、ていうかルイなりの応援？！ ああ、小梅さんに聞こえなくてよかった……！ あの人はこんなこと聞かされたらきつと爆発しちゃうよー！

ルイはぐつと体を起こすと、小梅さんに軽く手を挙げて挨拶をした。

「それではまた明日の午後にも！」

「あ……え？ 午後……」

小梅さんはちよつと首をひねった。カザムさんは心無しか頬が赤い。うーん、可愛いなあ。「ひゃあ！」合図もなしにルイはアンピイを走らせた。あ、もしかしてカザムさんに見とれてたの、バレたのかな？

そんな私の気持ちを読んだかのように、ルイは前に座る私の腰を片手でぐつと引き寄せて、

「今夜はオレの我がまま聞いてくれよな。心配させた分」

と囁いた。いやーっ、普段あまり言わないこの人の我がままっ

て、もう、アレなんですけど！　とは言うものの、やっぱり期待で胸膨らむ仲直りの夜。

「…行っちゃった。え？　行っちゃった？　か、カザムさん、私たちも帰らないと…」

振り向くと、カザムさんはメモを書き終わって、ポステを呼んだところだった。夜でもお構いなしの勤勉な小鳥は、カザムさんのメッセージを夜空へと運び、星の中に紛れていく。

「離宮に知らせを送りました。ルイさんマドカさんと行き違いになった、連絡は取れたけど俺とコーメは遠くまで来てしまったので、明日帰ると」

「ええっ？」

「ほら、片付けもありますし、すぐには帰れないでしょう？」

カザムさんが私の背中を押し、私たちは別荘に向かって歩く。テラスから暖炉の部屋に入りながら、彼は首をこき、と鳴らしてため息をついた。

「慣れないことをしたので、疲れました。でも、二人が仲直りして良かったですね。まさかプロポーズみたいな場面に立ち会うとは、驚きましたか」

私は一瞬息を飲んで、視線を泳がせた。

「コーメ？　どうしたんですか。ルイさんも言ってたでしょう、そればかりが幸せじゃないって」

顔を上げる。カザムさんは私を優しく見つめた。

あ…この人はわかってくれてる。私が、こちらの世界での結婚という形を、決して望んでいないわけではないこと。それが重荷になることだつてあることを。

カザムさんは真摯な瞳をして私の手を握ると、言った。

「コーメと、コーメだけの“森男”の関係だって、特別で、最高に幸せだと思いますよ…？」

私はそつと、頭を彼の胸にもたせかける。思い切り、甘えたくなくなる。

「…カザムさんから、まどかさんの香りがしたことがあったの…あれは？」

カザムさんは不思議そうに考え、ああ、と笑う。

「あの日はずつと、マドカさんの上着を持っていました。それでかな」

なんだ…でも、もつと言っちゃう。

「ルイさんを焚きつけるためとはいえ、ビックリしたんですから…あのメッセージ」

カザムさんは、静かにささやいた。

「すみません。でも、コーメはきつと気づいてくれると信じてましたから」

きゅんっ、と胸が鳴った。

ずつと、自信を持ってないでいたこと。カザムさんが、私を…私がカザムさんに向ける気持ちを、信じてくれている。

照れなんか吹っ飛んだ。私は気持ちのままに、カザムさんの首に飛びつくように抱きつくと、初めて彼にその言葉を言った。

「カザムさん、好き…大好き」

「！」

急にカザムさんの両手に力がこもって、肺から空気が押し出されるくらいの勢いで抱きしめられた。ぐふ。

「コーメ。俺、獣になってもいいですか」

「へ？ ティンプに？」

「…やっぱりそっちですよ…」

「そっちってどっち？ …あ、ああ、獣ってあっちか、あっちですね、えつと」

その意味を遅ればせながら理解して、全身真っ赤になった私に、彼が言った。

「コーメは、俺を“森男”って呼ぶ時の方が、俺に近づいてくれて

る気がします。…今夜はずっと、そう呼んでくれますか」

その夜、私が何度“森男”の名前を呼んだかなんて…全然、覚えてない。

翌日、カザムさんとアンピイ二人乗りで離宮に戻ってきた小梅さんは、見ものだった。

私とルイの顔を見てにっこりして、

「おはようございます！ 昼だけど！」

まずさっそく噛んで、カザムさんの手を借りながらぎくしゃくとアンピイから降りる。耳、赤っ！

一方のカザムさんは、なんだかえらくスッキリした顔をしてらっしゃいますが？

「ちよつと、洗濯物を置いてきます！」

別荘から持ってきたらしい荷物を抱え、逃亡を図ろうとする小梅さんに、私はすすすと近寄って。

「昨夜は、どうでした？」

ぎゃふん、と小梅さんが固まる。ぎゃふんって言ったよこの人、ぎゃふんって。

でもすぐに、彼女はこちらを向いて背筋を伸ばした。お、開き直ったかな？

「す、素敵な夜でしたよ。カザムさんの新たな一面を見たっていうか？ まどかさんこそ、どうだったんですか？」

「しゃべっていいんですか？ 大体このくそ暑いのに私がパンツルックでいなきやいけないのはもちろん、お察しの通り体中にあの人が手当り次第に跡を付けまくったからです。まあ、そんなこと言えば彼も相当引つ掻き傷だらけですけど。昨日は離宮に戻ってくるなり庭から俵担ぎで寝室まで運ばれ、服を脱ぐ間を惜しんで取りあえず、1回……」

「ストップ！　そこまで！　やっぱりいいです！」

顔を見合わせて、私たちは同時に吹き出した。

向こうの方では、ルイとカザムさんもなにやらこそこそと話している。うわー、やーらしい！

「小梅さん」

私は小梅さんに向き直った。

「ごめんなさい、今回は…勝手に勘違いして、小梅さんのことまで疑って」

「そんな、私の方こそ、誤解を招くようなことして。危うく、ウィオ・リゾナの思い出がひどいものになるところでした」

「ううん、小梅さんは悪くないんだから、そんなこと言わないで！

ね、何かお詫びに、私にできることないですか？」

申し訳なさそうな顔でまどかさんが謝ってくれる。早く彼女を笑顔にしたいくて、私は急いで言った。

「あっ…それじゃあ、お願いしたいことがあるんです。私の先生になって下さい！」

って、なんかもう十分色んな事を教わった気がしますけどね今回！

「ええっ？　先生？」

まどかさんが目を丸くした。

昨夜、アレコレの合間に、カザムさんと今回のことについてぼつぼつと話をしている。まどかさんが自然療法に携わっている人だっ  
て聞いたんだ。しかもそれは、もともとは日本で学んだものなんだ  
って。

私の“星心術”による回復術がうまくいかないのは、回復に使う  
印がこちらの考え方に基づくもので、私のイメージと合わないから  
じゃないかと思って。それなら、まどかさんの持つ知識を元に印を  
組み直せば、もしかしてもしかするかも。

まどかさんは私のつたない説明を聞いて、うなずいてくれた。

「そういうことなら、喜んで！」

今度こそ、何の憂いもなく輝いた笑顔。まどかさんは、やっぱり綺麗な人だ。私は思わず見とれてしまった。

この笑顔は、ルイさんに愛されてるからこそ…なんだなあ。

日本に帰る機会を手放し、こちらの世界に残ったまどかさん。

こちらの世界の人間になっただけで、どちらの世界も選び取っていない私。

二人とも、何かを失わずにはいらなかったけれど、それでも近くに大切な人がいてくれるから…私たちは『楽園』を感じることができる。

「それじゃあ、実践から入りましょうか。さっそく小梅さんの身体に教えてあげる…」

「え？ え？」

「腰、辛いでしょ？」

まどかさんは妖艶な笑みを浮かべた。ひゃあ〜バレてる！

昨夜は思い知りました。カザムさんの想いに「応える」ためには、まず身体を鍛えることが必要だって。

そうして、まどかさんがイリア・テリオに帰るまでの間、私はまどかさんによる短期集中回復術講座に明け暮れた。

取りあえず、五行と陰陽の基本的なことから、こちらでも使われる一般的なハーブの効用などなど。ああ、ハーブもそれぞれのイメージをしっかりと持てば、その効用にちかいエネルギーを引き出せるかもしれない。火傷の場合と打ち身の場合はまた違うアプローチの仕方があると思うし。ハーブのことはまたラズトさんにも聞いてみよう。

ルイさんのアシストには、カザムさんがついた。

「最初っからそうしてりゃ良かったのよ！」

とはまどかさんの弁。激しく同意です。

「あ。そうだ、小梅さん。秋にはバーシス主催の短期パートレニングワークシヨップがあるんですけど、申し込み用紙送りましようか？ カザムさん、味を占めてこれから大変ですよ！ ルイが今頃なにか変なこと教えてるかもしれないし」

私の考えを見透かしたように、まどかさんはにやつと笑った。

「ええっ?! 変なこと……って! ええっ! 困る……!」

慌てる私を可笑しそうに見ながら、彼女はさらりと

「まあ、取りあえず毎回素早く回復出来るように回復術をマスターしましょうね。自分自身はもちろん、大切な人を回復させられる素晴らしい術を」

そ、そうですね! まず出来ることからゆっくりと!

私は大きく息を吸い込み、自分の中でイメージを膨らませ始めた。日本と、この世界と。大切な人たちの顔を思い浮かべながら。

【楽園を吹く風】『Elysium』x『離宮の乳母さま』 完】

## あとがき (遊森謡子様との対談)

改めましてこんにちは。高宮です。遊森様、今回は本当にお疲れさまでした。

振り返れば、6月中旬に遊森様が「逆お気に入り」にしてくれたのがきっかけで。

私はコンタクトとってくれた方には必ず絡みますから。とくに、作家様からのコンタクトは激薄なんで、飛びつきますね。早速作品を拝見させていただいたらハマった。Fall in Love. その後、遊森様もフレンドリーなお返事くださって。本当に嬉しかったです。感激。

それからは、もう猪突猛進。何回かメッセージの交換をしていきなりプロポーズした運びですね。

「コラボお願いします!!」と。(w  
どんだけがつついてるの。って。ほんと、万年発情期のルイだ、自分。

さて、あとがきと称しまして、実は遊森様へのインタビュー!これ、もうコラボ作品作つてるときからやりたかったんです! ファンだから!遊森様の!

それでは早速!(以下、高宮:T 遊森様:Y)

T:今回の作品で好きなシーン、セリフ。自作部分からと、高宮のところから。いくつでも!

Y:いっぱいあります!

まどかがカザムを焚き付けるシーン。3時のおやつは吹いた! ヤキトリが微妙に大きいとこ。

まどかの「ゆるして」っていうまで...「は何度読んでもゾクゾク。

ルイが小梅を励ますとこ。まさに言うて欲しいセリフで。

アニマル柄絆創膏。やはり動物は外せない。

ブラックカザム降臨、そのメッセージ。二人だけの暗号

別荘にて結婚にすぐにはなびかない女性陣、そしてカザムの「特別で、最高に幸せ」発言。

翌朝のギクシヤク小梅。一番小梅らしいシーンかなって。

T：あゝ、焚き付け、ですね。あれ、私の本音ですから。まどかに言わせた。

「カザム、行けっ！柱の影で最後までいけっ！！」くらい言わせたかった。実は。

ルイの励ましかゝ。そうですね、小梅は相手のことを考えすぎて考えすぎて行動になかなか移らないタイプ？切れたら強いけど、多分、誰かに押ししてもらわないと踏み出せないんじゃないかと。それで。

まどかの「ゆるして」は「もつとして」だから。あれは序の口ですよ〜。

アニマル柄絆創膏！ちなみに何でした？柄は？私はゼブラを想像しました。

ブラックカザムのメッセージには震えが来ましたね！！カザム、おまえも出来る子じゃん！って。暗号もほんと、バッチリハマって素敵でした。

Y：アニマル柄はですね…ふふ。正確にいえば「柄」じゃないんですよ。くまちゃんの顔が横一列についてるの（笑）

T：あ、そっちか！余計に可愛い！！

T：コラボで楽しかったところは？

Y：お互いの書いたセリフやシーンがどんどん繋がっていく快感！本編完結させても、まだ刺激が続いていて続きの物語があふれてくるのが感動でした。

世間でコラボやってる書き手さんは、いつもこんなイイ思いして

んですかコンチクショー！

T：私も楽しかった！他の作家さんがどうやっているのかわかりませんが、たぶん、相当良いコミュニケーションがとれないと難しいところもあるんじゃないかな。

その点、遊森様は「作家仲間」というビジネスライクな関係に限定せず個人としてもすごく魅力的な方で、普段の交流がとても楽しく、それで作品作りも盛り上がったって言うのは私の方の感想です。そして、コラボしてからますます「乳母さま」の愛情深まりました！  
Y：あつそれわかります。メールのやり取りがお互いを煽って煽って、もう止まらない感じてしたもんね！

T：コラボで苦労したところを。

Y：具体的には、カザムのポストメッセージ。高宮さまはご存知ですが、思いつくまで何日もかかって。高宮さまがその手前の、まどかが離宮を飛び出してカザムに色々ぶちまけるシーンを書いて下さって、

それを読んだとたん陣痛が来て（\*^|^\*）、5？の赤子をスポーンと産み落とした気分でメッセージを思いつきました。

全体的なところは、やはり高宮さまの文章力についていくのが難しかったかな。

私の書き方って、行動だけ書いて「裏にあるものは読者さまが察して」っていうところがあって、そういう書き方もありかもしれないけどやっぱり少しずるいので。

高宮さまは表現することから逃げない、とこれはコラボ前から思っていたことですが、私も逃げるわけにはいかないぞ！と。この機会にレベルを引き上げてもらうんだっ、と食いついたつもりです！  
T：そうそう、なんか悩みメッセいただきましたね。暴露しちゃいますけど遊森様が、「カザムのメッセ、「夕食はいりません」で、どうでしょう、でもこれではサラリーマンが妻に送るメッセージのようで……って。”それを読んだときもう腹抱えて笑いました。で

も、結局すごいのが来て。さすがだなと。

あれ？付いてくるのが難しかった？そう言われれば、なんか今回の遊森様「具が詰まってる」感があったかも。すごく読ませてますものね。確かに『乳母さま』読んでいるときは、こっちの想像と遊森様の描く世界を楽しめた、ってそう言われれば合点。でも、それだけ雰囲気を作れるのもうらやましい。私はガチで読ませるタイプだから。たまにうっとうしいかと。じゃあ、そう言う意味では遊森様は相当食いついてましたね（w

Y：はいっ。がっぷりと。普段の書き方だと、高宮さまと遊森がそれぞれどこを書いたかばれちゃいますしね！

T：ぶっ！あくまで隠し通すと。遊森様、ノリ易い……？！あ、いい意味で！もちろん。

T：コラボ作品を作りながら気がついたこと

Y：やっぱり、自分の未熟なところがどんどん自覚されますね！

前述のこととか。でもやっぱり、気がついたと言えば、「なにこれコラボめっちゃ楽しい！ 勉強になる！」ですね（^^）

T：私はすごく楽しかった。だって、打てばいい球が帰ってくるんですもの。あー、すごいらくちん。って。だめ？こんなこと言っちゃ？でも、それは遊森様のストーリーが良質だから。それにつきま

す。

T：ずばり、高宮の印象。ちなみにコラボ作り前とその後のね

Y：（前）硬派な方だ。

（後）硬派な方だけ……（以下略（笑））。

T：なにそれ！！そこ略しちゃダメでしょ！！読者様が誤解するでしょ！！うそうそ。まあ、でも「硬派」って嬉しい。書いてることは「軟派」かも知れないけど。でも譲れないところはしっかりと取り組んでるつもりだし。遊森様の印象は……以前は「可愛いお嬢さん」で今は「学級委員」。

Y：学生時代やってましたねえ。学級委員。私たぶん、いい意味でも悪い意味でも真面目なタイプだと思います。

T：今だから言ってしまうですが、お互い蓋を開けてみればめっちゃめっちゃ共通点があってビビりましたね。まず実名の名字が一緒って！！

Y：本当！ あれが一番ビビりましたよね。夫に「最近ネットで仲良くしてもらってる人が、名字一緒だった」って話したら、「実はオレだ、ふはははは」って（^^;） 高宮さま「遊森の夫説が一気に浮上。

あと、聴いていた音楽とか。音楽の趣味が合う人ってかなり貴重。あれで盛り上がりが（私の中で）頂点に。

T：これは遊森様への作品作りのときの一般的な質問です。個人的に聞きたいものばかり。

まずー作品作りでネタ先？キャラ先？

Y：完全にネタ先ですね。キャラは書きながらどうにかする…というか、勝手についてきます。

T：うわ、真逆だ。私はまずキャラ。例えばElysiumだって、はじめは鳳乱と獅子王とまどかのトライアングルだけ考えていました。ルイという人物はほんと、いきなり出て来て。じゃあ、コイツをまどかとどうにかせようって。今やヤラせてるだけの感も否めません！

T：ネタはどんなときに浮かんで来ます？ネタ作り、作品作りの場所、時間などを

Y：主婦の城・キッチン。料理と小説はそこで生まれます（笑）

ポメラ持ち込んでます。まあ、後は本当にいつでも…下の子の昼寝中とか、夜に子ども寝かしつけてる時とかに妄想を膨らませてます。

T：じゃあ、人参の皮剥きながら「おはようございます！」っていうセリフが出てくるんだ。（w なるほど！でも、書く作業はや

はり、お子さんが寝てから？

Y：そうですね、昼間に妄想をメモしておいて、夜に一気にまとめる感じですね。

T：私は書く作業はもっぱらカフェです。家の中じゃもう生活臭がぶんぶんだめ。ノートとシャーペンというアナログ駆使して。妄想はもっぱら寝る前。だから起きると忘れていることもしばしば。

Y：ああ、カフェいいですね！ 私、書くのは家だけど、読書はカフェです。

T：人の本棚覗くの大好き！さつ、好きな本5冊オンラインでもオフラインでも教えてください！

Y：上橋菜穂子の「精霊の守人」シリーズ、小野不由美の十二国記シリーズ、真保裕一「奪取」、クリステイ「そして誰もいなくなつた」、宮部みゆき「蒲生邸事件」。最初の二つはファンタジー、後の三つはミステリー。遊森はミステリーフリークで、昨年一年間を自分の中で「ミステリー読書年」と定めて、ミステリーばかり80冊読みました！

T：うー、クリステイと宮部みゆき以外知らない……チエックしてみよう！！私はフォークナー「八月の光」、カミュ「異邦人」、吉本ばなな「キッチン」、向田邦子「父の詫び状」、オンラインでフクロモモンガ（敬称略）「魔女とコヨーテ」シリーズ、です。実はけっこう偏って読んでます。

T：ずばり書くこととはなに？

Y：な、なんだろう？ 自然すぎて…何かのホルモンみたいなもの？常に分泌してて、お肌や気持ちが増してくるような？

T：ホルモン！！でも、それで読者様も遊森様の作品を読んで幸せになれるから、一石二鳥ですよ！うん、いいなあ。そう言う感覚。私は常に自分との対話だなあ。だから読者様はズーっと私の独り言を読まされているって訳です！！

Y：自分との対話か…やっぱり硬派だあ。心理表現の巧みさ、納得

です。

T：それでは最後に作品作りに対して今後の自分への課題を

Y：情景描写・心理描写をレベルアップしていきたいと思っ  
てはいますが、一番はやっぱり遊森らしさをこれからも出して行くこと、  
自分も読者さまも楽しめること！ ですね。

T：「楽しむ」ことは基本ですよね！！遊森様らしさって、もう、  
私はセリフを噛んじゃうシーンがあれば大満足ですが！……それ  
だけじゃないですけど！テンポの良さとか切り口がさっぱりしてい  
て清々しい。私は、もっとボキャブラリーを増やしたいな。外国に  
いると使う日本語がものすごく限定されますから。インプットもな  
いし。難しい言葉をわざと使うのは私の中でナンセンス。で、基本、  
5歳児にも読んでわかる内容を目指してるんですけど。って、おい、  
R18は5歳児に読ませられないだろ、というところなんですけど  
ね。(w)

Y：あはは！ そうそう、私も難しい言葉や漢字は使いませんね。  
読んで、すっと入って来るように。普通なら漢字で書く所も、ぱっ  
と見て読みにくいと思ったらサクッとひらいちゃいます。趣味で書  
いてるとはいえ、やっぱりたくさんの方に読んでもらいたいから。

最後に遊森様、今回の私の我がままに快くお付き合いくださり、本  
当にありがとうございます！！

今後も末永くよろしく願います！

Y：こちらこそ、きっかけをありがとうございます！ これから  
もよろしくお付き合いください！

おまけ 似ているあのひと（前書き）

ラストも帰って来たという設定で、その翌日のお話。遊森謡子様にお許しをいただき、ラストを拝借しました。この作品は高宮オムリで仕上げました。

## おまけ 似ているあのひと

ウィオ・リゾナでの10日間の研修が無事終了し、さて帰りましようという日に嵐が襲った。木がなぎ倒されるほどのすごい雨と風で結局足止めをくってしまった。

翌朝は、前日の嵐が嘘のようなすがすがしさだった。木々の間からきらめく朝日が地面に編み目模様を揺らしていた。

ただ、なぎ倒された木やもぎ取られた枝や葉が庭にその痕跡を残しているだけだ。

小梅さんが目の前で手際良く朝食の支度を整えてくれる。お客として招待されたとはいえ、なんだかいつも悪いなあと思いつつ、結局甘えている。

「昨日は本当にすごかったですね。でも今日は本当にいい天気。空気も洗われたように美味しいし」

彼女が白いポットを傾けると、湯気を立てて紅茶がカップに落ちた。そして「ごゆっくり」とにっこり笑って食堂を出て行った。いろいろ後片付けが大変みたい。

「まあ、休暇ももらってるからな。この際もう少しここに滞在させてもらうのもいいかも。オレ、仕事ばかりで実際この街観光してないし。昨夜ラズト殿も帰って来たし、いろいろ話したいこともあったところだ。バーシスのフィードバックも聞きたい。おまえも医療の方でなにか教えてもらえるかもしれないぞ」

彼はコーヒーのカップに手を伸ばした。

「うん……いいけど、お邪魔じゃないかなー……」

紅茶にミルクを入れてかき混ぜていた私は、食堂の入り口から近づいて来る長身の男性に気がつきふと手を止めた。いや、手が勝手に止まった。心臓も、止まるかと思った。

「おお、噂をすればラズト殿」

「おはようございます」

ルイは隣に来た男性を立って迎えると、握手をした。

「まどか、こちらがラズト・ジエガルト殿だ……」

「殿、はやめましょう。私も遠慮なく『ルイ』と呼ばせていただきますから……初めまして。ラズトです」

ぼーっとその銀髪の男性を見ていた私は、挨拶のために伸ばされた手に初めて我にかえった。

「あつ、えつ、金目まどかです」

慌ててがたがたと椅子を鳴らして立ち、その綺麗な手を取った。

あ、いい手をしている。思わずその手をじっと見た。

「おい、いつまで握ってるんだ？ ラズトが困ってるぞ？」

ルイに言われて慌てて手を離れた。あ、失礼だったかな……

ラズトさんを見上げると、彼は私を見てはにかんだ。きゅっと胸が痛んだ。

私は、この人が嫌い。

朝食を終えて部屋に戻ると、まとめていた荷をもう一度出した。ルイが朝食後に小梅さんを通じて、残りの休暇をここで過ごす許可を得ていたからだ。ルイは、さっきラズトさんが彼に渡したバーシスのフィードバックをレポートにしたものを読んでいた。

すごい、あの人。もうまとめたんだ。仕事早いな。

私はもう一度ラズトさんの顔を思い浮かべると、心の中がざわめくのを感じた。急に不安になって、ルイのもとへ行った。

「どうした？」

彼は椅子をずらして体を私の方に向けた。私はその彼の脚をまたぐように座る。まるでパパに甘える娘の図だ。私は彼の首に腕を巻き付け、体重を預けた。

「私、ルイが一番好き」

急にルイが私の体を引きはがし、正面から私を見つめた。

「おい、じゃあ二番目は誰だ？　そしてその差はどれくらいだ？　答えによつてはその名前をオレの『殺すリスト』の一番にしなきゃならないからな」

彼の瞳は笑っていないかった。もう、どれだけ独占欲強いのか。私は思わずくすつと笑って

「じゃあ、ルイだけが好き」

と言い直した。そしてもう一度彼の首にかじり付き、彼の香りを吸い込んだ。ルイは答えに満足したのか、よしよし、と私の背を撫でていた。

私はラズトさんが嫌い。

だって、彼は鳳乱に似てるから。いや、似ているわけじゃない、似ていると言えば髪の色くらいだ。ただ、雰囲気は何となく彼を思い出させるのだ。

鳳乱。この世界での初めての私の恋人。そしてこの世界にもう存在しない人。

強くて、温かくていつでも私の隣にいた人。繊細で、でも情熱的な人。ずっと一緒にいるって言ったのに、ユランを守るために自分の身を犠牲にした人。

「まどか？　おまえが甘えてくるのはいつでも大歓迎だけど、今このレポートを読んでしまいたいんだ。少し時間くれるかな」

「あ、ごめん……」

私はルイから身を離れた。そしてそのままの姿勢で彼の、前髪の隙間から見える瞳を見つめた。その瞳には問いかけの色が浮かんでいた。

「なんでもないの。……ルイ、私が二番目に好きなのは、鳳乱なの……」

私は彼の膝から降りながら言った。ルイが目を少し細めた。そしてすぐに普段の彼に戻ると

「じゃあ、仕方が無いな」

と言った。

私は「庭を散歩して来る」とだけ告げて部屋を出た。

ルイに悪かったかな、急に鳳乱の名前を出したりして。何でも無いふうを装ってたけど、多分、ルイは気にすると思う。あとでちゃんと「ちよつと思いだしただけ」って話しておこう。

庭では庭師さんたちが昨日の嵐の名残を大方片付けてしまったところだった。芝生に舞い放題だった葉は全て除去され、折れた枝は接がれていた。

私はまだ雨のにおいが残る湿った青草の上をゆっくり歩いた。

「きゃあ」

突然足下に何か毛玉が絡み付いた。それは私が声を上げたのにびっくりしたのか、また茂みの中へ隠れてしまった。それでも顔だけ出して興味深そうにボタンのような濡れた黒い目で私を見上げていた。

「あつ、可愛い。おいで〜。ごめんね、びっくりしたんだよね。

とーとととー……って、これじゃ富良野のキツネになっちゃうか」

私がいしがみ込み、手のひらを差し出していると、そのリスのような動物はちよろちよろつと出て来て、手のおいを嗅ぎ始めた。

「あゝ、もしかしてこれがティンプかな。まさかおまえ、カザムさんじゃないよね。なんか食べるもの持っていれば良かった。何にもないわ」

ティンプは私の手首に前足を掛け、不思議そうに私を見た。そしてするりと私の後ろに回り込んだ。

「あー、行っちゃおうの……？」

小さな友達を追ってそのまま体を反転させると、白いズボンの裾と、茶色のモカシンの先が視界に入った。ズボンの折り目に沿ってそのままゆっくり視線をあげて行くと、ラズトさんの優しい微笑みに出会った。やっぱり、その微笑みは反則だ。胸が苦しい。

ティンプが彼の腕に乗り、手のひらから木の実を拾い出していた。「庭を散歩するときには、ポケットに木の実や種を入れておくといいですよ。必ずと言っていいほどティンプや他の動物たちに出会いますから」

私はどうしてか、気まずいところを見られた感を抱きながら、視線を地に落としながら立った。

「手を出してください」

私は言われるままに手を出すと、そこに彼は自分の手の中の木の実を移した。すかさずティンプはその重なった手の上をささっと私の方へ渡ると、忙しく木の実を口に運び始めた。

「うわ、食べてる〜」

当たり前のことを口にして、私はまた急に恥ずかしさを覚えた。

やだ。ラズトさん、早くどこかに行ってくれないかな。間が持たないし。話すこともないし……。

「マドカさんのことはルイからよく聞いてますよ。よく、といったもたまにしか会うことが無いから言うほどでもないけれど」

私はティンプのふさふさの背中をを見つめたまま、上から聞こえて来る声に「はあ」とだけ応えた。

「さっきコーメから聞きました。彼女、簡単な回復術はマスターしたようですけど、マドカさんが指導してくれたと私に自慢していました。オレが教えてもなかなか上達しなかったのに、マドカさんが数日でマスターさせてしまうとは。正直驚きました。……よかったです少しお話を聞かせていただけませんか」

えっ……全く予想していなかった展開にさすがに動揺してしまう。その頃にはティンプは木の実で頬をいっぱい膨らませ、「ごちそうさま」と尻尾を揺らしてすると私の体を伝い降り、茂みのな

かへ入ってしまった。本当に二人っきりの気まずさに、なんと答えようかと言葉を探す。

「……もし、あなたにとって迷惑でなければ、ですが」

こう言われては断る言葉も見つからない。

「迷惑だなんて……」

「それでは私の診療所へご案内しましょう。少し歩きますよ」

ラストさんは並んで歩きながら、庭の花や木々の名前やその性格なども教えてくれた。ほとんど口を開かない私に、気を使ってくれたのだらうか。

離宮から少し離れて、木々に囲まれてぼつんと診療所は建っていた。

「どうぞぞ」

招き入れられるままに中に入ると、部屋の中には白木の床の上に座り心地の良さそうなアンティークの布ばりの長椅子、横には小さな丸テーブル。角に医療用の白いキャビネットとシンプルなデスク。庭に面する一面はガラス戸で、光と、手入れをされた庭の花の数々を楽しめる。なんだかサロンと言われても頷いてしまう雰囲気だった。

「お茶をいれましょう。どうぞ座っていてください」

彼が別室に繋がるドアの奥に姿を消すと、私はやっと深く息をついた。

彼は湯気のとつマグカップを丸テーブルに置くと、長椅子の、私の隣に腰掛けた。

「どうぞ。オレがブレンドしてみたんで、感想を聞かせてください。私はひとくちそれを口に含んだ。ほわっと中で香りが膨らんだ。」

「ハレオ、フーミンカ、モレス……ミント……あといくつか入っているとありますが、私にはわかりません。でも、すごく美味しいで

す

「ありがとう。しかし、さすがですね。あとホブとリンデが入っています」

「えっ、ホブの苦みが全然出ていないんですけど」

ラストさんは悪戯っ子のような笑みを瞳に浮かべた。

「秘密があるんです。モレスとブレンドすると苦みが抑えられるんですよ。だから子どもにホブを処方するときはモレスと一緒に使うといい」

「秘密をそんなに簡単に教えてしまっていていいんですか」

彼は不思議そうに首を傾げた。

「どうして？ こういう利用価値のある秘密はどんどん伝えられるべきです。あ、それでは秘密、とはいいませんね。いずれにせよ病で苦しむ人の数が少なくなつて欲しいというのは医療に携わるものの日頃なる願いですから。そう思いませんか」

「……おっしゃる通りです」

この人の前にいると、本当に自分が無知で小さな存在に思えてしまう。鳳乱のときもたまにそんな思いを抱いたことがあるけど……もう、帰りたいな……。

「あ、いいものをあげましょう」

彼は席を立ち、キャビネットの中からいくつか小袋を手にとると私に差し出した。

「これは……？」

「アカルデイルでは手に入らない植物の種です。カミネオス、ジュラ、イメリオーザです。そちらの気候にも合ってるから育てるのに問題は無いと思いますよ。育て方と効用は袋に書いてあります。こちらの言葉ですから、ルイに読んでもらつていいでしょう。それで今回私が持ち帰つたそちらの植物で……」

彼はまだ手にしていたいくつかの種の袋を私に見せて、その効用と育て方のコツを尋ねて来た。幸い良く使う種類のもので、彼が満足するまでその質問に答えることが出来た。

「助かりました。あとで自分で調べようと思っただけですけど、やはり実際使っている方から教えていただくのが一番ですね」

彼はお茶を飲み、カップを持ったままじっと私を見た。スリムなかたちのメガネの奥で、金茶の瞳が控えめに光る。

「初めて会ったときから気になっていたので、マドカさん、オレの前だとかかなり緊張していますよね。オレが怖いですか？」

私は彼がいきなり急所を突いて来たことに驚き、息をのんだ。

「……そ、そんなことはありません！」

動揺を隠そうと思わず必要以上に声が高くなる。これじゃあ肯定しているようなものだ。バカな私。

「それでも、あなたのエネルギーがオレにそれをちゃんと伝えてくれるんです。あなたは気がつかないかもしれないけれど」

「エ、エネルギーが？」

「うん。あなたの中のエネルギーは普通の人よりも常に大きく、活発に動いている。マドカさんはまだそれをコントロールする術を知らないんだと思うが、それをコントロール出来れば、自分をネガティブなエネルギーから守ることも出来るし、他人の治療に大きく働きかけることもできる。で、あなたのエネルギーはオレの前だともすごく張りつめたものになる」

「Dr. リウはそんなこと一言も……」

「オレもあなたの師匠に会ってきましたが、彼女は天性のものを持つてるから自分で自然とコントロールしている。だから、他人にどうやってそれをするのか教えることが出来ないんだ。こっちに来てごらん。これもコツさえ掴めれば簡単だから……あ、その前に」

彼は窓を開けて庭に向かって口笛を吹いた。ポストだ。白衣の胸のポケットからペンとメモを出し、さらりと何かをそこへ書き付けると、小鳥にメッセージを託した。その一連の動作をただじっと見ていた私に、彼は顔をほころばせる。

「ルイにメッセージを出しておいたんです。マドカさんはここにいます。彼はあなたのことにかけては特別、心配性ですからね」

ああ、ルイってば外でどんな風に私のことを話してるの。

「あ、ちよつと今緊張が緩んだ。ルイの名前が出たから安心したのかな」

ラズトさんは再び私の隣に座ると、体を私に向けた。私はそんなことを言われるとことさら恥ずかしくて彼を直視出来ない。

「はい、両手をオレの方にかざして」

言われるがまま、彼の胸の高さに手の平を向けた。彼もそれに触れるか触れないかの位置で合わせた。お互いの手のひらの間で急に熱が生まれた。

「あ……熱い……」

驚いている間にも熱は手のひらを通じてゆっくりと私の中へ入って来る。

「オレのエネルギーがそちらへ移っています。昨日の長旅と転移の術で少し疲れているから、元気にしてください。マドカさんはただ、その熱を受け入れて、体の中で循環させるイメージを持って。それだけでオレのエネルギーが浄化され、活気を得ますから。そしてそれはオレのもとへ、自分の来たところへ自然に流れます。これによってあなたのエネルギーが消耗することはありませんから安心して。逆にオレのエネルギーに共鳴することで、自分の疲れや傷も癒えます。そう、ただ流れを感じて……」

私はラズトさんの言う通りにただ、体を流れる熱を感じた。それは心地よくて、懐かしかった。まぶたを閉じて体中に流れるものを素直に受け入れた。

「あっ……！」

突然の異変に思わず声が出る。胸の奥で何かが無理矢理開くのを感ずる。嫌悪は無いけど、すごく、苦しくて……このしこりのようなものをどうすればいいかわからない。呼吸が苦しくなってきた。私の変化にラズトさんが気がつき、きゅっと指を絡めて手を握ってくれた。

「大丈夫、マドカ、大丈夫だから……きちんと呼吸をして。それは

君の大切なものだから。隠さないで出してあげるといい」

彼の、私の名を呼ぶ声に、なぜか涙があふれて来た。そのしこりがとろとろと溶けて、まるで目から溢れ出して来たかのような。私は呼吸を整えながらも、切れ切れに彼に訴えた。

「私は……ラズトさんが、嫌いです……」

彼は片手で私の頭を胸に抱き寄せた。私はそこでも涙を流し続けた。

「それは、オレが鳳乱に似ているから？」

私は弾かれたように顔をあげ、彼の顔を見つめた。

「どうしてそれを……」

ラズトさんは再び私の頭を胸に抱え込み、ゆっくりと、なだめるように撫でた。

「ルイがオレに会って開口一番、そう言ったから。『ラズト殿はオレの幼なじみにそっくりだ』と。あ、マドカはちゃんとまだ呼吸に集中して。ごめん、オレ、あなたの古い傷に気がつかなかった。回復術をすると、自分の中のまだ癒えてない傷も癒そうとして、反応してしまっただ。もちろん、回復に向かうんだけど傷が深ければ深いほど、反応は強い。マドカの鳳乱の想いは、まだ傷という形で残っていたみたいだ。あなたのなかにまだうまくとけ込んでいなかった。それを起こしてしまったね。でももう大丈夫だから」

彼に大丈夫、と言われると自然と気持ちが落ち着いて来た。私は彼の胸の上に問いかけた。

「じゃあ、きつとルイはあなたと私を合わせたくなかったんじゃないですか」

「いや、その逆です。彼は鳳乱とあなたの関係をオレに話した上で、『まどかがラズト殿に会ったらびっくりするだろうな』と、何度も言っていました。彼は、あなたの中に常に鳳乱がいることなんて百も承知です。その過去を含めて今のあなたがあるのですから。それでも、ルイはあなたと一緒にいたいんです。あなたの隣にいたいんですよ。ねえ、ルイ」

え？

私は顔を上げて振り向いた。

部屋の入り口に、恋人が肩で息をしながら立っていた。

「ま、まー、そう言うことだけだな。それにしても、ラズト、このメッセージはなんだよ！ カザムといいおまえといい、ここの男どもは学校で繊細な文章表現を教わっていないのか?!」

つかつかとルイは私に歩み寄ると、ラズトさんの胸から引きはがし、代わりにそのメモをラズトさんに突きつけた。ラズトさんはちらとそれを見てテーブルに置く。

「だって、この言葉通りじゃないですか。『マドカはラズトと診療所にいる』あなたが変に深読みし過ぎるんです。よけいなストレスを抱えると脳細胞が早く死にますよ」

「あーあー、ご忠告ありがとうございます。で、まどかはラズトに泣かされたのか」

ルイは私を抱きしめて、額にくちづけた。私はなんだか胸がいつぱいで言葉に詰まってしまった。そうじゃないのに。ラズトさんが悪いんじゃない。

「なんて人聞きの悪い。鳳乱が少し出て来ただけです。でも、多分もう大丈夫でしょう」

私はルイの腕の中で体の向きを変え、長椅子の上のラズトさんに向き合った。

「ごめんなさい、『嫌い』なんて言ったりして……本当はそうじゃないのに……」

ラズトさんは全てわかっているという笑みを浮かべた。

「あれですよね、『いやいやよも好きのうち』とか。カザムが昨日教えてくれましたよ。あなたから教わったという女性の心理を。私はなんでもポジティブにとりますから、マドカさんの気持ちはわかっているつもりですよ」

えっ、あ、それは……

「いやいやいや、ラズト、そこはそんなに前向きに取らなくてもいい

いぞ。それにまどかは何でこと教えてるんだ。ここの男どもは甘やかすとつけあがるタイプだから言葉に気をつける」

「あなたにそこまで言われるとは心外ですね」

呆れたように肩を落とすラズトさんに、つい吹き出してしまった。

休暇も終わり、本当にイリア・テリオに帰らなくてはならない日が来た。

船の前で小梅さん、カザムさん、ラズトさん、そしてレモニーナさんとお別れをする。小梅さんなんてもう涙ぐんじやって、本当に可愛い。私もつられて目頭が熱くなっちゃう。

「小梅さん、別にこれが最後って訳じゃないんですから。今度は遊びに来てくれるでしょう？」

「はいっ、是非……ぐすつ。まどかさんもお元気で。……ルイさんとあまり張り切りすぎないように……」

って、抑えるところちゃんと抑えているよねえ、彼女。思わず笑ってしまう。

「レモニーナ殿、皆さん、大変お世話になりました。イリア・テリオとウイオ・リゾナ王国の友好関係もぜひこれからもよろしくお願ひします」

ルイがバーシスの代表らしい挨拶をして、私を船に促した。

船がどんだん地を離れ、彼らの姿が点になるまで私は手を降り続けた。

人との出会いがどんなに大事なものか。そしてぶつかり、わかり合うことの大切さ。それをすごく感じたウイオ・リゾナでのひととき。

私は船の中でさっそく、街で見つけたレアなお土産を披露し出した。

いろいろあるけど、なかでも最高に嬉しいのは去年小梅さんが自ら収穫して、作った自家製の梅酒！！ 大きめの保存瓶にうぐいす色に色が変わった梅がごろごろ揺れている。ああ、これをキンキンに冷やしてちびちび飲むんだ！ 薄めてごくごくいってもいいかも！ 我慢して3年ものとか！ うーテンション上がる！！ あ、そうそう、レアと言えば……

「ルイー。見てみて。これ、長官にお土産なんだけど」

「何それ。マグカップ？ そんなのバーシスに腐るほどあるだろ」

ルイは運転席からちよつと顔をひねってみただけで、すぐに運転の調整の続きをし出した。私はその彼の隣に行き、カップを突き出す。

「よく見てよ。これ、レモニーナさんよ。三年前に彼女が王国の『なんとか名誉賞』を取ったときの記念カップ！ お土産シヨップで見つけたんだけど、まだ残っていたのはラッキーだったって、小梅さんも感心してたわ」

「マジかよ……」

彼はカップを手に取って、その上にプリントされたレモニーナさんをしげしげと見た。

「これって、古傷に塩をぬる……って、まあ荒療治だけどそれも回復術……？」

「なにごちゃごちゃ言ってるの？ ね、長官喜ぶよね。私、上司思いだとおもわない？ ……きゃあ！」

いきなりルイに膝の上に抱き寄せられる。

「何？ それって、シャムの名前も『殺すリスト』に入るってこと？」

「ええ？！ 幼なじみまで入れるの？！ なんかルイ、戦闘モードにスイッチ入ってない？！ どうしちゃったの？」

ルイは私の耳たぶをくわえながら囁いた。

「んー、まあ、外に出たらオレもおちおち安心していられないって学んだだけだ」

「そう？ ルイは今のままオレ様でいいよ？ 成り上がっていいのに」

「それじゃあ、お言葉に甘えて……」

彼はいそいそと私のシャツの下に手をくぐらせる。

「え？ 何？！ 何するの？！」

「ナニするんだよ。他にやることなんかないだろ」

「ちよつと、きゃー！ やだ、カップ落とす！ せめてちゃんとこれ置いて……」

「……ホント、あきらめの悪いヤツだな。毎回毎回……」

ルイは私の手からカップを取り操縦席に置くと、露になった私の胸に遠慮なく顔を埋めた。

やーーーーー！ レモニーナさん、この絶倫男をどうにかしてくださいーーーー！ 鉄拳を一発ーーーー！！

私はカップを横目でみるが、彼女はただ優しく私たちを見守るだけだった。

【似ているあのひと 完】

おまけ 似ているあのひと（後書き）

時を経て、この後ちょっとした情事へ発展します。こちらでは語れませんので、気になる方は『ムーンライトノベルズ』へお急ぎください！タイトル「ひと夏は終わり」です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9244u/>

---

楽園を吹く風～『Elysium』×『離宮の乳母さま』

2011年8月10日03時24分発行